

かみぬのめ
富山市上布目遺跡
発掘調査報告書

- 土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2002

富山市教育委員会

かみぬのめ
富山市上布目遺跡
発掘調査報告書

- 土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 -

2002

富山市教育委員会

例 言

- 1 本書は、富山市上布目91番地外に所在する上布目遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、上砂採取事業に伴うもので、富山上石協業組合（理事長 竹内弘剛）の依頼を受けて富山市教育委員会が実施した。
- 3 調査期間 現地調査 平成13年2月26日～平成13年4月11日
出土品整理 平成13年5月21日～平成14年3月28日
- 4 調査担当者 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 主任学芸員 古川知明
- 5 調査にあたり、富山県埋蔵文化財センターの指導を得た。また現地調査から報告書作成に至るまでに、次の方々の指導・助言・協力を得た。記して謝意を表します。
荒川伸二、金塚進午、塙田明弘、竹野 熊、中村太一路、布作良一、前田英雄、麻柄一志、宮田進一、渡辺 崇、富山市月岡校下自治振興会、上布日町内会、株式会社荒川総（順不同、敬称略）
- 6 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の執筆は、当センター職員の協力を得て古川が行った。

目 次

例言

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯	4
III 調査の成果	5
IV まとめ	22
報告書抄録	26
図版	27

I 遺跡の位置と環境

上布目遺跡は、富山市街地の南約10kmの富山市上布目地内に所在する。

大山町の中央、標高1,600m級の東笠山・西笠山周辺に源を発する熊野川は、文殊寺付近の台地部から平野部に入ると西流し、大山町東福沢辺りから北西方向に向きを変えて神通川へ合流する。上布目地区は、東福沢のやや上流の右岸低位河岸段丘上に立地しており、標高は85m前後を測る。

上布目周辺には、旧石器時代から近世にわたる数多くの遺跡が所在する。

旧石器時代から縄文時代草創期には、南西方の神通川右岸高位段丘である大沢野町舟倉段丘上に直坂遺跡(国史跡)、八木山大野遺跡が所在する。

縄文時代中期になると、舟倉段丘のほか、熊野川上流左岸の高位段丘上に文珠寺神田遺跡、東黒牧上野遺跡など大規模集落が營まれるようになる。東黒牧上野遺跡では35棟にも及ぶ竪穴住居群が確認されており、環状をなす集落構造が想定できる。

後期から晩期には、熊野川右岸の扇状地上に遺跡が数多く形成されるようになる。上布目遺跡をはじめとして、この扇状地上に独立丘陵として存在する月岡塙ノ山遺跡のほか、下熊野遺跡、吉岡遺跡、悪王寺遺跡、上野井田遺跡など、熊野川から3km圏内に遺跡の形成をみる。吉岡遺跡や悪王寺遺跡では竪穴住居跡や土器窯窓跡が確認されている。

弥生時代から古墳時代には熊野川左岸高位段丘に小規模な集落跡がわずかに形成されるほか、熊野川右岸扇状地にも小規模な遺跡が点在する。吉岡遺跡では墓とみられる土坑が數基確認されている。

奈良・平安時代には熊野川右岸扇状地に遺跡が増加する。特に標高60mより低い下流域での遺跡密度が高くなるとともに、規模の大きな開墾集落跡が出現する。上新保遺跡では奈良時代から平安時代前期に百棟を越える大規模集落跡が営まれ、上野井田遺跡、吉岡遺跡でも建物が発見されている。上新保遺跡や経力遺跡では多くの烟跡が確認されており、陸稻や雜穀栽培を主力とした初期墾田の姿が浮び上がる。

鎌倉～戦国時代には、この地域は国領を起源とする太田保に含まれる。室町期には大浦保や徳大寺家領宮河庄が成立している。室町期以降太田保の庄官百姓層は国人・土豪化し有力となっていた。布目村には黒尾喜左門の名がえみる。このころの遺跡は熊野川右岸扇状地のほぼ全体に分布し、遺跡規模も大きくなる。また小佐波御前山山麓に山城が築造されることが特色としてあげられる。扇状地を見下ろすものには大山町櫛木城、日尾城、津毛城、大沢野町中尾館があり、越中飛驒を結ぶ交通の要衝である神通渓谷を望むものには大沢野町梅尾(戸川)城、猿倉城があり、扇状地上には上熊野城、八川城、太田本郷城などの平城も所在するなど、軍事的緊張状態にさらされた地域であった。

このほか経塚や墓地・埋納遺構も多くみられる。江本経塚は享禄四(1531)年銘の石塔を持ち、近接する塚根経塚では妙慶を供養する一字・石経の埋納があった。上布目地内には本遺跡と隣接して備蓄錢を埋納した上布目埋納跡が所在する。一帯は黒尾氏の屋敷跡と推定されており、多くの五輪塔や板石塔婆が認められる。

遺跡の西2kmには飛州往来と呼ばれた飛驒街道の一路ト布市道が通過し、交通の要衝であったことを示す。



第1図 上布目遺跡(1)と周辺の遺跡 (1 : 50,000)

表1 上布目遺跡と周辺の遺跡

番号	道 路 名	所 在 地	墳 墓	宮 之 々 年 代
1	上布目	富山市上布目、上今町	春秋墓、墓地	続文(後一神)、奈良、平安、中世 奈良、平安、中世
2	大字洞	富山市上布目、下今町(ほか)	故布地	中世
3	中布目	富山市上布目、片岡西郷町	故布地	平安、中世
4	木村	富山市上布目	故布地	続文(後)、奈良、平安
5	櫻根御保	富山市上布目千代町	故布地	中世-近世
6	江本經保	富山市上布目本	故布地	中世
7	月照新安寺古跡	西山市上布目、大丁町	故布地	中世
8	前免覚川	富山市上布目、月照町5丁目	故布地	続文(後)、平安、中世
9	月照町二丁目	富山市上布目町	故布地	奈良、平安、中世
10	月照町	富山市上布目、月照町	故布地	奈良、平安、中世
11	大字野	富山市上布目、林崎ほか	故布地	平安、中世
12	大字野跡	富山市上布目	故布地	平安、中世
13	大字野跡	富山市上布目	故布地	平安、中世
14	百足	富山市上布目、小字野ほか	故布地	奈良、平安、中世-近世
15	百足	富山市上布目、百足	故布地	湖沼、奈良、平安、中世
16	伊豆富	富山市上布目	故布地	湖沼(少)
17	森森、森山屋尾寺跡	富山市南郷、上家	故布地、寺跡	奈良、平安、中世-近世
18	古岡	富山市南郷、福井ほか	故布地	湖沼(後)、弥生(中)、奈良、平安、中世
19	竹作所	富山市南郷町5丁目、慈王寺ほか	故布地	古墳、奈良、平安、中世
20	下酒野	富山市上布目ほか	故布地	奈良、平安、中世-近世
21	蛭力	富山市上布目、古岡、南金屋	故布地	湖文、秀宗、奈良、平安、中世-近世
22	上空	富山市上布目	故布地	中世
23	赤坂	富山市上布目、上空、右田ほか	故布地、城跡跡	湖文(後)、奈良、平安、中世
24	大入屋・神保	富山市上布目、大入屋	故布地	中世
25	大入屋(すもうとうわら)	富山市上布目、大入屋	故布地	中世
26	高倉寺跡	富山市上布目、7丁目	故布地	中世
27	西	富山市南郷、中川	故布地	奈良、平安、中世-近世
28	木本寺	富山市南郷、小河ほか	故布地	奈良、中世-近世
29	興國寺跡	富山市南郷、月照町6丁目	故布地	古墳、平安、中世
30	白山社	富山市南郷	故布地	中世
31	白山社	富山市南郷、引野	故布地	湖文(後)、奈良、平安、中世
32	石出	富山市南郷、引野	故布地	奈良、平安
33	上野	富山市南郷、上野	故布地	奈良、平安、中世
34	上野丘田	富山市南郷、上野	故布地	奈良、平安、中世
35	二段	富山市南郷、二段、上野	故布地	湖文(後)、奈良、平安、中世
36	高木	富山市南郷、小河ほか	故布地	湖文(後)、奈良、平安
37	大字井井戸	富山市南郷、月照町5丁目	故布地	湖文(後)、奈良、平安、中世
38	細崎御保	富山市南郷、集落ほか	故布地	平安、中世-近世
39	上新屋	富山市南郷、新屋	故布地	奈良、平安、中世-近世
40	木通町	富山市南郷町、木通	故布地	奈良、平安、中世-近世
41	川元・神村	富山市南郷、城村	故布地	中世
42	越村跡	富山市南郷、城村	城跡	中世
43	西条御保	富山市南郷	故布地	中世
44	西新中南A	富山市南郷	故布地	中世
45	草葉経保	富山市南郷	故布地	中世
46	西新中南B	富山市南郷	故布地	中世
47	西ノ森経保	富山市南郷	故布地	中世
48	五丁場家・船塚	大丸町多賀口	墓	中世
49	中番古出上塚	大丸町多賀口	墓	中世
50	大河内	大丸町多賀口	故布地	中世
51	大河内山	大丸町多賀口	故布地	中世
52	武藏郡神社	大丸町多賀口	故布地、墓	中世-近世
53	金糞冢遺跡	大丸町多賀口	墓	中世-近世
54	日揮野鶴穴	大丸町多賀口	その他の	中世-近世
55	文珠寺跡	大丸町多賀口	故布地	湖文(前-後)、平安
56	里樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	集落跡	日(前)、平安
57	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
58	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
59	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
60	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
61	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
62	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
63	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
64	東樂谷・野瀬路五堆	大丸町多賀牧上野	故布地	湖文
65	野瀬谷墓地	大丸町多賀牧	墓	中世-近世
66	東樂谷・野瀬路	大丸町多賀牧	故布地	中世-近世
67	東樂谷・野瀬路	大丸町多賀牧	故布地	中世-近世
68	東樂谷・野瀬路	大丸町多賀牧	故布地	湖文(日朝-朝、中)、平安
69	津波城	大丸町多賀牧	山城	奈良
70	津波今前	大丸町多賀牧	故布地	奈良-平安
71	船津寺跡	大丸町多賀牧	故布地	日(前)、跡(中)、奈良、平安
72	大河内	大丸町多賀牧	故布地	日(前)、奈良、平安
73	大林井森森の墓	大丸町多賀牧	墓	日(前)、奈良、平安
74	大河内	大丸町多賀牧	故布地	日(前)、奈良、平安
75	大河内日原	大丸町多賀牧	墓	日(前)、奈良、平安
76	大河内日原	大丸町多賀牧	故布地	日(前)、奈良、平安
77	中央畠高島	大丸町多賀牧	故布地	湖文(中)
78	中央畠高島	大丸町多賀牧	故布地	奈良(後)
79	万願寺	大丸町多賀牧、大丸町東福院	故布地	日(前)、跡(中)、奈良、平安
80	柳林	大丸町多賀牧	故布地	湖文
81	小原	大丸町多賀牧	故布地	湖文
82	森	大丸町多賀牧	故布地	湖文
83	大野井	大丸町多賀牧	故布地	旧日服、湖文(後)
84	丸山大野井	大丸町多賀牧	故布地	日(前)、古代
85	森	大丸町多賀牧	故布地	湖文
86	森合	大丸町多賀牧	故布地	湖文(中)
87	大河内人	大丸町多賀牧	故布地	中世
88	大河内跡	大丸町多賀牧	故布地	湖文(中)
89	大河内寺	大丸町多賀牧	山城	中世
90	大河内寺	大丸町多賀牧	故布地	日(前)、湖文
91	(国宝) 盆鏡	大丸町多賀牧、御前	集落跡	平安-鎌倉、湖文
92	盆鏡	大丸町多賀牧	故布地	湖文、中世
93	御前鏡	大丸町多賀牧	故布地	湖文
94	御食持城	大丸町多賀牧	山城	中世
95	中尾城跡	大丸町多賀牧	山城	中世

II 調査の経緯

上布目遺跡は、昭和63年から平成3年に行なわれた市内分布調査で新たに発見された遺跡である。この遺跡範囲の北西寄りの地点においては、昭和47年は場整備工事の際珠洲焼甕に入った埋蔵錢が出土し、1976年発行『富山市遺跡地図』に175「上布目埋納跡」として搭載されていた。上布目遺跡はこの「上布目埋納跡」を含めて、平成5年3月発行『富山市遺跡地図（改訂版）』にNo.576「上布目遺跡」として登載したものである。

遺跡の南端部は大山町域まで広がる。平成8年の試掘確認調査では熊野川辺から150mほどは河床灘で遺跡が所在しないことが確認された。また平成9年、12年の宅地造成等に伴う試掘確認調査では、1地点で縄文時代晩期の遺物包含層が確認されていた。

平成12年11月、遺跡北西部において富士山石協業組合による土砂採取計画が提示され、11月16日に埋蔵文化財の所在確認依頼書が提出された。11月20日付けで周知の遺跡範囲であることから試掘確認調査が必要である旨回答し、協議の結果、同社の掘削機械提供等の協力を得て試掘確認調査を実施することになった。この調査は、同年12月26、27日に降雪の中15,861m²を対象とし、73か所の試掘トレンチを設定して実施した。

調査の結果、工事区域の中央付近140m²及び東端50m²の2地点計190m²の範囲に土坑・溝跡など多数を検出し、遺跡の存在を確認した。結果は組合あて平成13年1月9日付けで通知した。工事は土砂採取で全区域を掘削するため190m²全域について発掘調査を行うこととなり、1月15日付けで発掘調査の依頼書が提出された。調査方針に関しては1月15日付けで協定を締結し、同年2月26日から約1か月の予定で着手し、4月11日までにすべてを終了した。

調査中に構造が調査区外に広がった部分があり、最終的な発掘調査面積は第1地区210m²、第2地区110m²の計320m²となった。



第2図 上布目遺跡（丸印）と周辺の旧地形（1:20,000）

明治43(1910)年大日本帝国陸地
測量部測図假製版より

調査期間中、地元上布目地区をはじめ、月岡東緑町福寿会の現地見学も催され、上布目町内で初めての埋蔵文化財発掘調査に関心をもっていただいた。

出土品整理は、平成13年5月7日付けで協定を締結し平成14年3月29日までの予定で着手した。



III 調査の成果

1 概要（第3, 15図）

第1地区において検出した遺構には、縄文時代の溝2本、土器集中地点1か所、中世の掘立柱建物3棟、竪穴状遺構2基、墓壙4基、土坑16基、小ビットがある。

第2地区において検出した遺構には、縄文時代の土坑1基、小ビットがある。

2 地形及び層序

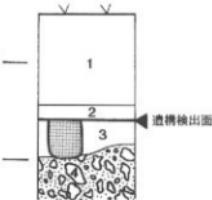
遺跡は、熊野川右岸の河岸段丘上に立地する。調査区は現在の熊野川から約650m北側の平坦地に位置し、標高は84mを測る。大日本帝国陸地測量部明治43年測図假製版二万分の一地形図「下大久保」によれば、大山町下大浦南部で熊野川から分岐した流れが遺跡のすぐ南端を通過し富山市大井方面へ流れている。したがって遺跡は小河川に面する微高地に立地していたことがわかる。しかし昭和40年代の圃場整備工事により遺跡周辺は大幅な地形変化を受けしており、今回調査した2地点においてのみ、かろうじて遺構が残存していたという状況である。



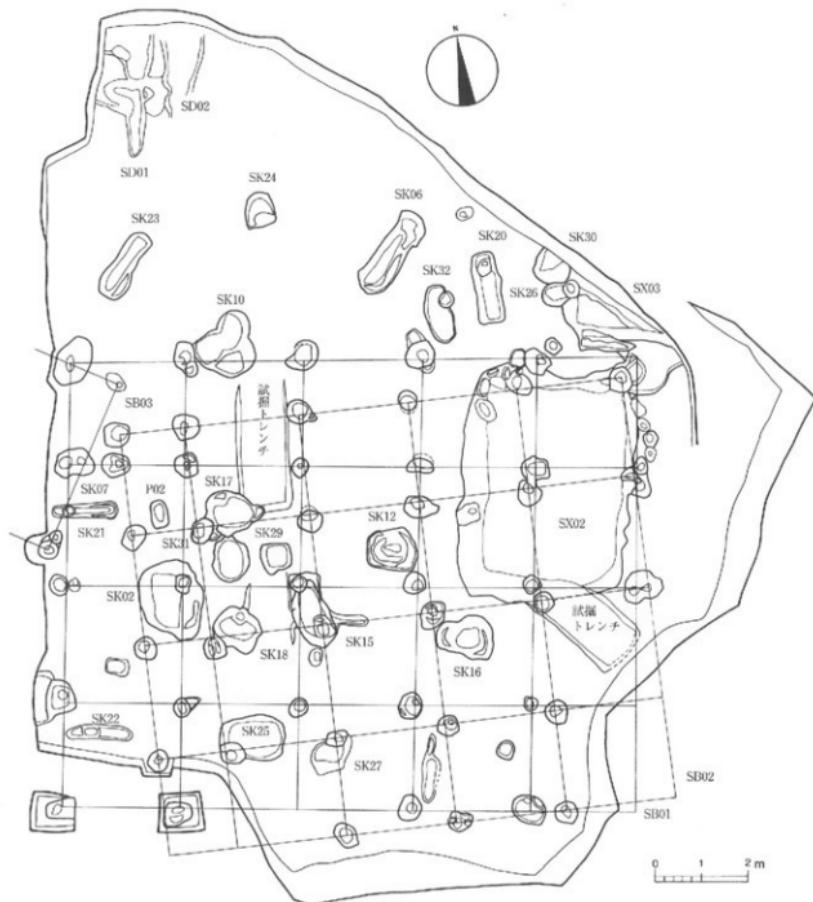
第3図 発掘調査区 (1:2,500)

第1地点においては、第1層：水田耕作土（表土、厚さ30cm）、第2層：暗褐色土（遺物包含層、厚さ5~10cm）、第3層：黄色砂質シルト（地山土）、第4層：疊層となる。調査区北西部においては第3層の堆積が不明瞭で、第4層の疊層が露出する部分がある。遺構検出面は第3層上面であり、柱穴等の深い遺構は疊層上部を掘り込んで構築されている（第4図）。

第2地点においては、第2層遺物包含層は欠失し、15cmの水田耕作土直下の第3層及び第4層が遺構検出面であった。



第4図 基本層序



第5図 第1地区遺構平面図 (1:100)

3 第1地点の遺構

- (1) 繩文土器集中地点 S X 0 1 調査区の北端において約1.5×1.0mの範囲に約20点の土器の集中をみた。地山の標層の上部に食込んだ状態のものが多く、破片でランダムに分布していた。いずれも縄文晩期後半の上器である。
- (2) 溝 調査区の北端の土器集中地点の西側において、南北方向に延びる溝2本を検出した。SD01は幅0.3~0.7m、深さ15cmの断面皿状の浅い溝で、延長約3mを検出した。溝の北側は次第に浅く広がり、端部はわかりにくい。溝内から縄文晩期上器が出土している。SD02は幅0.5~0.9m、深さ5cmの断面皿状の浅い溝で、延長約2mを検出した。SD01同様溝の北側は次第に浅く広がり、端部はわかりにくい。溝内から縄文晩期上器が出土している。SD01、02とも縄文晩期の築造と考えられる。

(3) 堀立柱建物

S B 0 1 (第6、7図) 柱行5間(12.5m)×梁間4間(10.0m)以上、面積125m²以上の大型総柱建物である。主軸はN-78°-Wの東西棟である。建物の西側は圃場整備で削平されており、また南側は調査区外のため建物の広がりは確認できない。

桁行の柱間寸法は、東端の1間が225cm(7.5尺)である以外は平均255cm(8.5尺)、梁行側は225~270cm(7.5~9尺)のバラツキがあり平均255cm(8.5尺)となる。柱穴は円形で、深さ24~58cmを測る。柱穴断面から観察される柱径は12~20cmで15~18cmが多い。10本には柱の抜取り痕が認められる。P22では抜取り後に拳大の隙を入れ込んでいる。

遺物はP21から切先を下に向けて直立した状態の鉄刀が出土した。柱穴の一方に寄っており、柱に添えて埋納されたものとみられる。建物建築時の祭祀行為と考えられる。この柱には抜取りは確認できなかった。P9から土師器皿・鉄釘、P7・P15上層・P20から土師器皿、P22からはU字状鉄器1点が出土した。

P18はSB02のP18と重複しており、切り合関係からこの建物がSB02より新しく構築されたものと考えられたが、観察は小面積での判断のため確定的ではない。

S B 0 2 (第6、7図) SB01とほぼ重複する。身舎は柱行4間(9.6m)以上×梁間4間(9.6m)以上で、西面に庇をもつ面積92m²以上の大型総柱建物である。主軸はN-84°-Wの東西棟である。南と東側は調査区外のため建物の広がりは確認できない。

桁行の柱間寸法は、230~250cmのバラツキがあり平均240cm(8尺)、梁行側は220~260cmのバラツキがあり平均240cm(8尺)となる。庇部分の張り出しあは140~160cmで平均150cm(5尺)である。柱穴は円形で、深さ23~57cmを測る。柱穴断面から観察される柱径は12~22cmで15~18cmが多い。庇部分の柱穴の形態は他の柱穴と同じである。

柱底は粘土で固めるもの(P1)、拳大の砾を根固めに置くもの(P7、P18、P19)がある。11本に柱の抜取り痕を認めた。P2では抜取り後に長径36cmの大形扁平な石を置いて塞いでいる。P9の上層から銅鏡1点(判読不明)、P9の中層から環状金具(第14図5)、P2上部・P3・P7・P13・P15・P17から土師器皿、P3から珠洲片口鉢、P10からは溶結凝灰岩片、P18からは柄の一部が付いた工具(第14図4)が出土した。

P11はSX01と重複しており、切り合関係からSX01がSB02より新しく構築されたものと考えられ、またP15はSK15と重複しており、切り合関係からSK15がSB02より新しく構築されたものと考えられる。

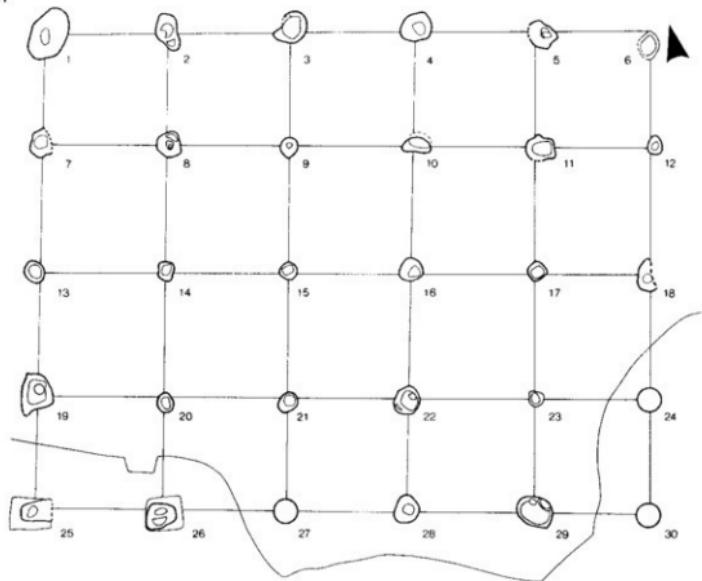
S B 0 3 (第5図) SB02の北西に接し、SB01と重複して位置する。東面の梁間2間分を検出した。主軸はN-55°-Eである。柱間寸法は、210cm(7尺)と180cm(6尺)を測る。柱穴は小形円形で、深さ34~53cmを測る。

P2はSB01 P7と重複しており、切り合関係からSB03がSB01よりも新しい構築と考えられる。建物の大部分は圃場整備で削平されており、広がりは確認できない。

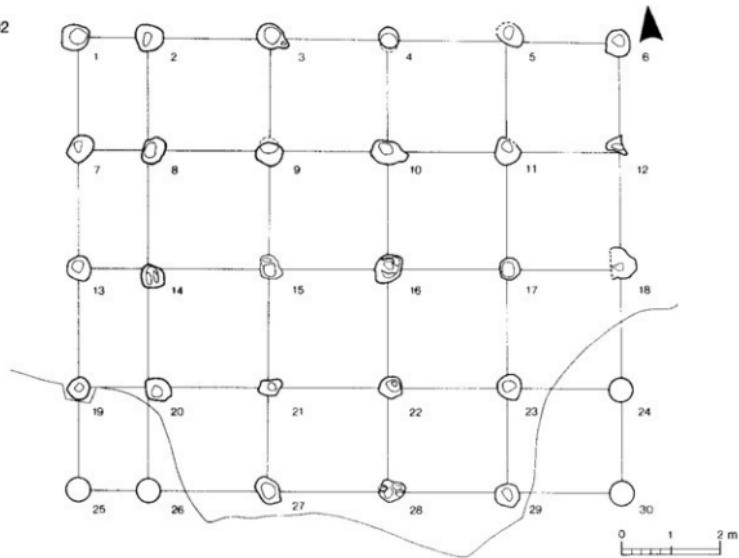
(4) 積穴状遺構

S X 0 2 (第5、8図) 堀立柱建物SB01の北東隅で検出した。長辺5.4m短辺3.6mの隅丸長方形プランで、深さ10

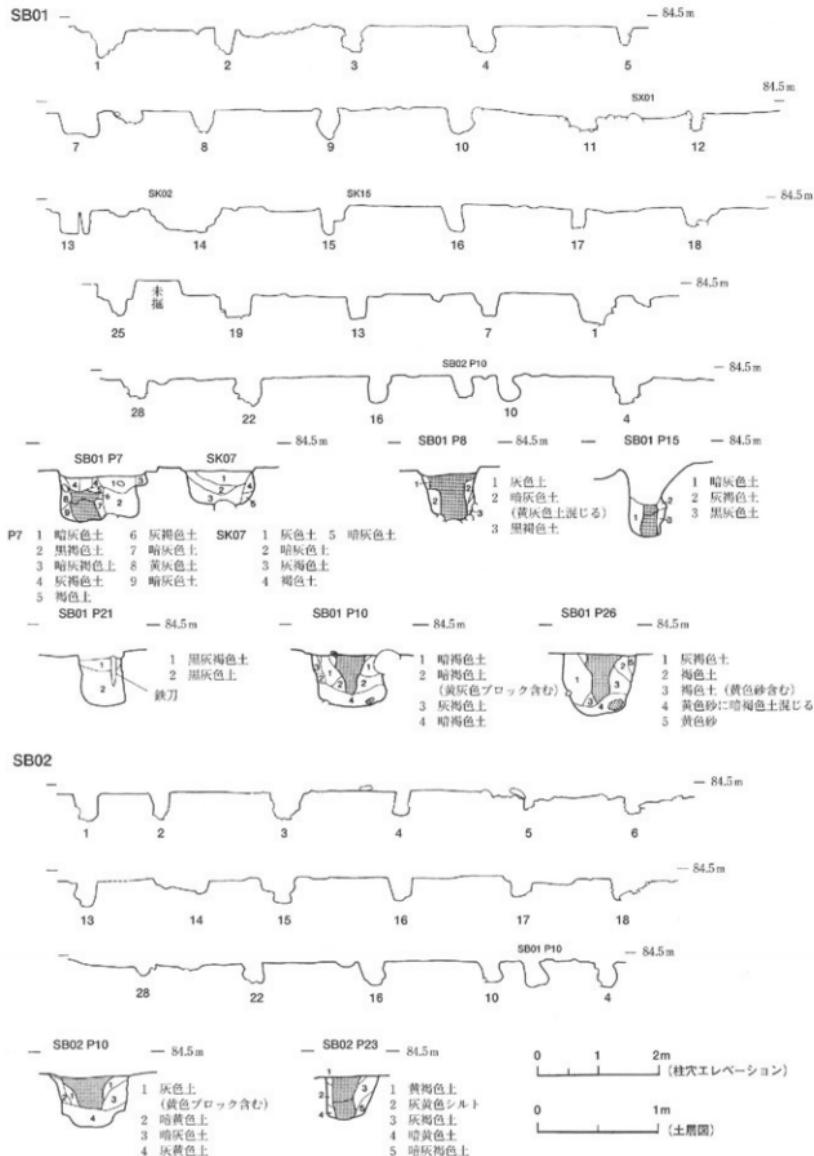
SB01



SB02



第6図 据立柱建物 (1:100)

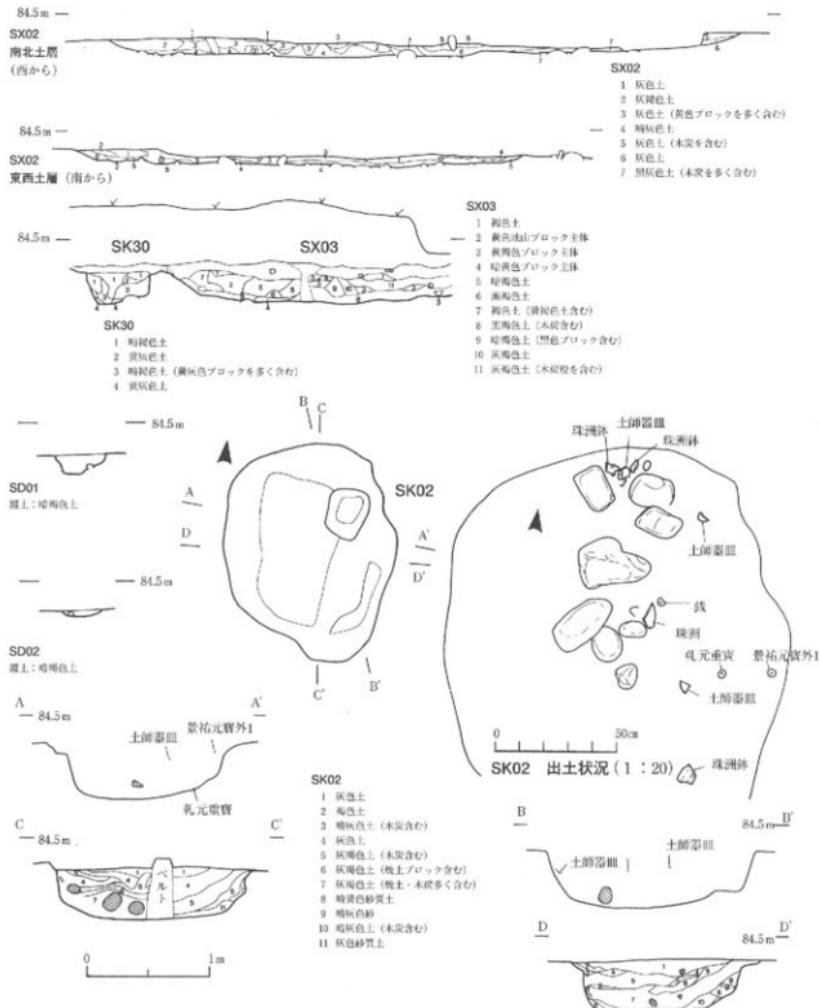


第7図 据立柱建物SB01・SB02実測図(エレベーション図 1:100、土層図 1:40、土層の網点は柱頭)

cmを測る。壁面は傾斜をもち、特に西壁は緩やかな傾斜を示す。底面は長辺4.2m・短辺3.0mの長方形で平坦面をなす。ところどころに地山面の円窪が露出するが、底面全体に粘土貼床が行われ極めて硬く縮まっている。

底面直上には厚さ5cmの炭層がほぼ全体にわたって堆積しており、薄状のその上に炭を含んだ灰褐色土が堆積する。遺物は土師器皿、刀子先端部（第14図2）、木炭が出土した。

この遺構は掘立柱建物SB01に付属する施設と考えられ、2間×1.5間分を占めている。



第8図 满SD01・02、竪穴状遺構SX02・SX03、墓壙SK02実測図（1:40）

表2 挖立柱建物柱穴一覧

SB01

ピッヂ	柱推定径	柱底径	柱底施設等	深さ	抜取り	遺物等	備考
1		11		43あり			
2	24以下	20以内		51			
3		24以内		50あり			
4	14	25以内		48			
5	20	14		42			
6		30以内		(17)			
7		24		44	土師器皿 SB03P2と重複		
8	19以内	15		42なし			
9	25以下	12		26あり 調査・土師器皿			
10	15	16		54			
11		28以内		(41)			
12		14		(32)			
13	14	12		46あり			
14		17		47			
15	14	16		58	土師器皿		
16	18	22		58あり			
17	15	22		35?			
18	15	18		44あり SB02P18と重複			
19	16	12		82あり			
20		16		50	盛土洋・土師器皿		
21	16以下	22		44 小刀	柱に添えて埋め U字状金具		
22	?	15		52あり	柱後路に櫛を入れる		
23		12		36あり	未検出		
24		16		31			
25	15	13		50			
26		12		24あり			
27		22		36		?	
28		8					

SB02

ピッヂ	柱推定径	柱底径	柱底施設等	深さ	抜取り	遺物等	備考
1		30以内	粘土整形	43あり			
2	?	14		52	土師器皿	13cmの盛土跡付	
3		32以内		40あり	土質器皿・灰陶		
4	12			27			
5		20		36			
6		22		40あり			
7	16?	15根圓石		57?	土師器皿		
8		14		42			
9		16		30あり 銅銭金具			
10	22	24		46?	凝灰岩片		
11	15	8		32?		SX01に切られる	
12	15	12		34あり			
13	?	20		54あり 土筋管皿			
14		22以内		11			
15	18	23		56		SK15に切られる	
16		18		44あり			
17		18		32あり 土筋管皿			
18	17	14	14縫(季大)	25あり	鉢状工具	SX01P18と重複	
19	?	13	下部に拳大壺 多くむ	23			
20	16	14		34?			
21		17		45			
22		23		41			
23	16	20		35あり			
24						未検出	
25						未検出	
26						未検出	
27		26		37			
28		15		37あり			
29		17		37			

S X 0 3 (第5, 8図) 挖立柱建物SB01の北東に隣接して検出した。SX02とは0.6m離れ、ほぼ同方向を示す。全体規模は不明で、東西2.4m南北1.6mを検出した。壁面はやや傾斜が強く、深さ25cmを測る。覆土は暗褐色～黒褐色土を主体とし、中層から下層にかけて木炭粒が少量含まれる。出土遺物はない。

(5) 墓壙

墓壙とみられる土坑は全部で9基ある。SK02, 17, 29, 31の4基は調査区南東部の径4mの範囲に集中し、銅錢の副葬品を伴う。SK12, 15, 16, 18, 25はそれらの東～南に所在し、覆土に焼土・木炭・骨片が含まれる。

S K 0 2 (第8図) 1.6×1.2mの楕円形形状を呈し、主軸はN-9°-Eである。南～東側に浅い張出しがある。底面は隅丸方形で断面は深いU字形となる。深さ0.9mを測る。

覆土はレンズ状堆積を示す。最下層には灰色砂質土が薄く堆積する。その上に木炭を含む薄い暗灰色土と焼土ブロックや木炭粒を多く含む灰褐色土が厚く堆積し、下層を構成する。中央から北側にかけての底面から上層にかけて10～30cm人の被熱した円錐が所在し、北端壁際には珠洲片口鉢・壺や土師器皿の破片が認められた。また南東側底面付近から乳元重寶、景祐元寶が出土した。景祐元寶にはもう1枚重なっている。

上層は部分的に木炭を含む層が見られるが、ほとんど焼土や木炭を含まない。遺構最上部の第1層中から銅錢6枚が重なって出土した。出土位置は遺構北東壁際である。

上坑内からの銅錢の出土は計12枚で、いずれも熱を受けて劣化が著しい。

掘立柱建物SB01P14と重複しており、この土坑の構築が古い。

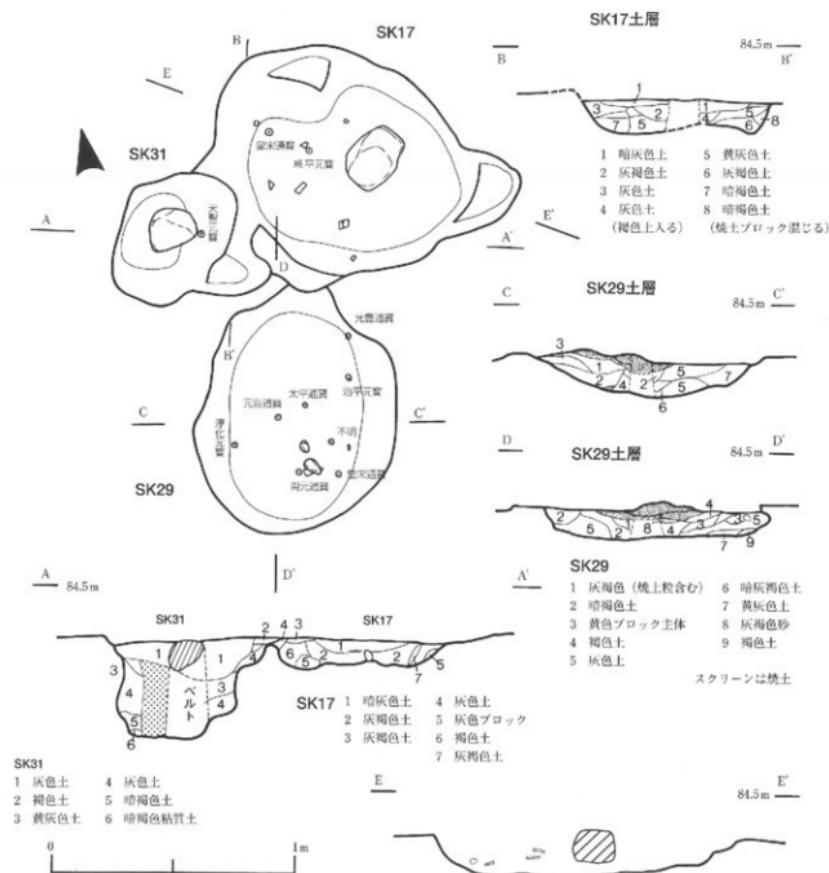
S K 1 7 (第9図) 西側はSK31に切られ、南西はSK29と接している。1.1×0.85mの楕円形を呈し、主軸はN-82°-Wである。土坑断面は彌形で深さ15cmと浅い。遺構内覆土は灰色土を主とし、焼土は南西壁際にブロック状に存在し

た。大型の被熱礫が土坑の中央やや東寄りにあり、周辺から銅錢、玉髓剝片2点、土師器皿、砥石が出土した。遺物はすべて上～中層から出土し、床面直上からの出土はない。

銅錢は咸平元寶、皇宋通寶、嘉祐元寶があり、咸平元寶は3枚、皇宋通寶は2枚が重なっていた。土坑内からの銅錢の出土は計8枚で、いずれも熱を受けて劣化が著しい。

S K 2 9 (第9図) 北側はSK31と接し、北東側はSK17と接する。1.0×0.8mの楕円形を呈し、主軸はN-9° Eである。土坑断面は皿形で深さ20cmと浅い。

土坑底部には木炭や焼土を含む灰色土が堆積し、中層は木炭や焼土を含まない暗褐色土、上層中央部には赤褐色焼土がブロック状にまとまっていた。



第9図 墓壙SK17・29・31実測図 (1:20)

遺物は、銅錢・砥石・小礫がある。小礫は上部から、銅錢は土坑底面から上面まで分布し、遺構の南東半に偏って出土した。砥石の端部は熱を受けて粉状化している。

銅錢は開元通寶、太平通寶、淳化元寶、景德元寶、皇宋通寶、治平元寶、元豐通寶があり、開元通寶は3枚、太平通寶は2枚、景德元寶は2枚、皇宋通寶は4枚、元豐通寶は4枚、判読不明の3枚が重なっていた。土坑内からの銅錢の出土は上坑群のうち最も多く計25枚を数える。いずれも熱を受けて劣化が著しい。中にはほとんど鉛化し泥状になつたものもみられた。

S K 3 1 (第9図) 東側のSK17と重複し、これより新しい。また掘立柱建物SB02の柱穴P8の上に構築されており、この掘立柱建物より新しい。平面形は梢円形で、長径0.6m短径0.45mを測る。主軸はN-9°-Eである。深さ20cmの灰色土(第1層)中には多くの木炭を含み、中央に被熱した20cm大の礫と大型元寶と融着した銅錢計2点が出土した。元來の墓壠部分はこの深さ20cmのところまでであり、土坑断面は皿形を呈する。

S K 1 2 (第10図) 調査区中央に所在する。上部は隅丸方形状、下部は円形プランとなり、長径1.1m短径0.9m、深さは15cmと浅い。主軸はN-75°-Wである。遺構覆土はほぼ単層で木炭を含む。上部には5cm程度の礫が散布する。北側の底面には厚さ5cmの木炭層が認められた。遺物には土師器皿、珠洲片口鉢がある。

S K 1 5 (第10図) 調査区中央部に所在する。平面系は梢円形形状で、長径1.6m短径0.8m、深さは25cmを測る。主軸はN-75°-Wである。遺構の上半には5cm大から人頭大の礫を含む。遺構覆土は、南側を中心に底部に厚さ5cmの木炭を含む層が堆積し、上部は一気に埋め戻したと思われる各種上の混合層により構成される。遺物には、土師器皿、珠洲片口鉢、工具とみられる鉄製品1点があり、遺物は礫とともに遺構の上半部から多く出土した。掘立柱建物SB02 P15と重複しており、本土坑の構築が新しい。

S K 1 6 (第10図) 調査区東部に所在する。平面形は梢円形形状で、長径1.25m短径0.95m、深さは30cmを測る。主軸はN-75°-Wである。底面から数cm浮いて拳大的熱を受けた礫10点が出土した。これらは遺構の南東半に集中する。遺構覆土には木炭や焼土を含む。

上層には焼骨片を含む。遺物には土師器皿がある。

S K 1 8 (第10図) 調査区南西部に所在する。平面形は隅丸方形状で、1.0×0.8m、深さ15~20cmを測る。主軸はN-40°-Wである。遺物には土師器皿、珠洲片口鉢、メノウ原石がある。覆土には木炭や骨片を含むが、ややまばらである。

S K 2 5 (第10図) 調査区南部に所在し、平面形は隅丸方形状で、1.45×1.0m、深さ20cmを測る。主軸はN-78°-Wである。覆土の上部には木炭や焼土を多く含み、特に東寄りには0.4×0.25mの広がりがある厚さ5cmの赤褐色焼土ブロックが認められた。また被熱した拳大的礫も多く含まれ、破碎したものもみられた。遺物は、土師器皿、凝灰岩製板状砾石がある。

掘立柱建物SB02 P20と重複し、この土坑の構築が古い。

(6) 土坑

長方形・長梢円状のものが多いほか、方形・梢円形のものがある。主軸方向は南北方向のもの、東西方向のもの、北西方向へ傾くもののほぼ3方向を示す。

S K 0 6 (第10図) 調査区の北東部に所在する。平面形は梢円形状で、長径2m、幅0.7m、深さ25cmを測る。主軸はN-48°-Eを示す。遺物には銀治済1点がある。

S K 0 7 SK21の北側に所在する柱穴状の土坑である。

S K 1 0 調査区の北部に所在する不整形の浅い土坑である。拳大的礫数点が壁際から出土した。遺構覆土内からは、上層から珠洲、床面上から繩文土器数点が出土した。

S K 2 0 (第10図) 調査区北東部に所在する。平面形は長方形で、長径2.1m、幅0.7m、深さ25cmを測る。主軸はN4°・Eである。最上層には木炭を少量含む。北半部からは拳大～人頭大の礫が出土した。遺物には珠洲甕破片があり、南壁際上部から出土した。

S K 2 1 調査区西部に所在する。平面形は長楕円形状で、1.45×0.3m、深さ9cmを測る。主軸はN-78°・Wである。西側底部には深さ23cmの小ビットがみられるが本土坑との関連は不明である。覆土には木炭・焼土を含む。遺物には、上器皿、木炭がある。

S K 2 2 調査区南西部に所在する。平面形は長楕円形状で、1.45×0.3m、深さ7cmを測り、主軸はN-77°・Wである。西側底部には深さ12cmの小ビットがみられるが本土坑との関連は不明である。約4.5m離れて所在するSK21と同方向、同規模を示す。

S K 2 3 調査区北西部に所在する。平面形は長方形で、1.6×0.5m、深さ15～20cmを測る。主軸はN-48°・Eである。遺物には珠洲甕破片があり、北東壁際上部から出土した。

S K 2 4 調査区北部に所在する。平面形は半円形状で、0.8×0.65m、深さ40cmを測る。

遺構覆土は一気に埋め戻したと思われる、地山土主体の各種土の混合上の単層である。

S K 2 6 調査区北東部に所在する径50cmの小型土坑である。竪穴状土坑SX03と重複し、SX03より古い。平面形は椭円形状を呈する。

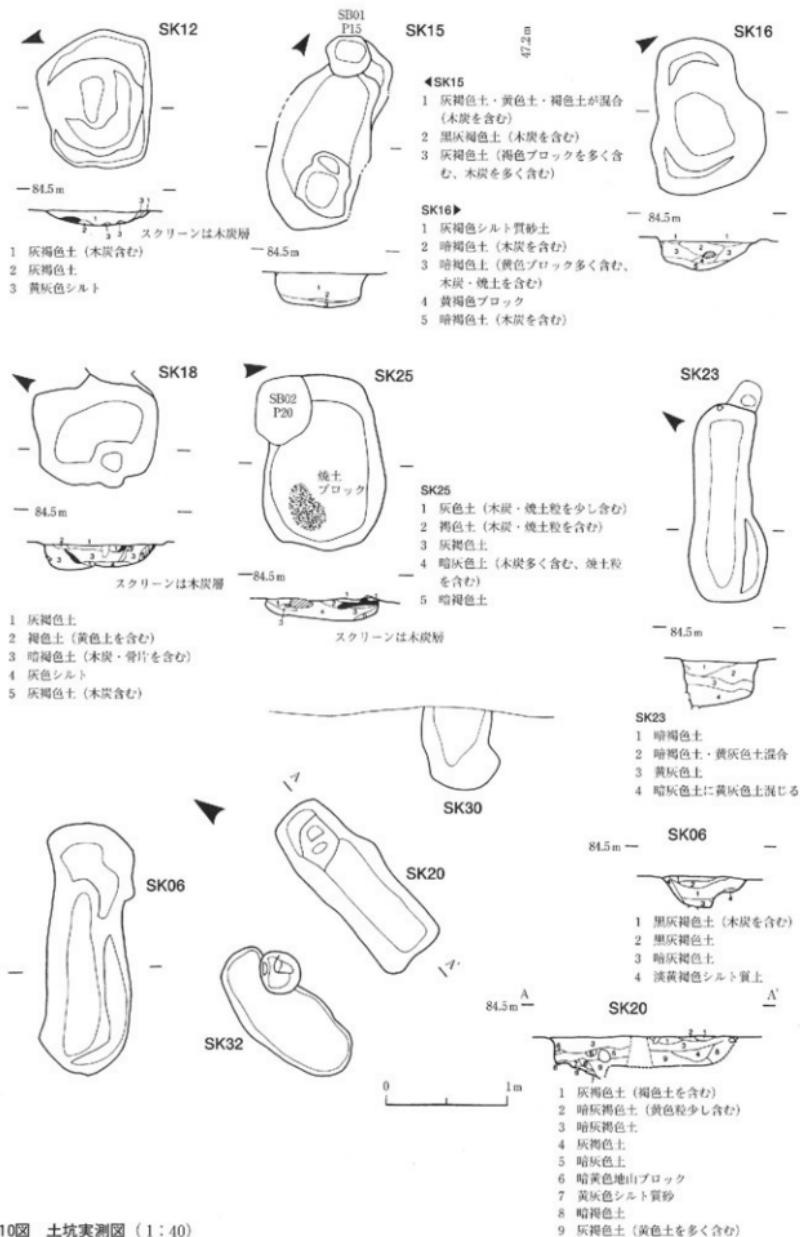
S K 2 7 調査区南部に所在する。隅丸方形のプランで、80×70cm、深さ15cmを測る。北側は掘立柱建物SB02 P21と重複しており、この土坑の構築が新しい。

S K 3 0 (第8、10図) 調査区北東部に所在する。平面形は楕円形状で、西側半分を検出した。上層から绳文晩期土器1点が出土した。

S K 3 2 (第10図) 調査区北東部に所在する。1.45×0.38mの長方形を呈し、主軸はN-4°・Eである。深さは10cmと浅い。東部に小ビットが存在する。

(7) 小ビット

P 0 2 SK02の北側に所在する不整形の小ビットで、壁際上層から銅銭1点(□祐□寶)が半欠した状態で上部から出土した。



第10図 土坑実測図 (1:40)

4 第1地点の遺物（第11～13図）

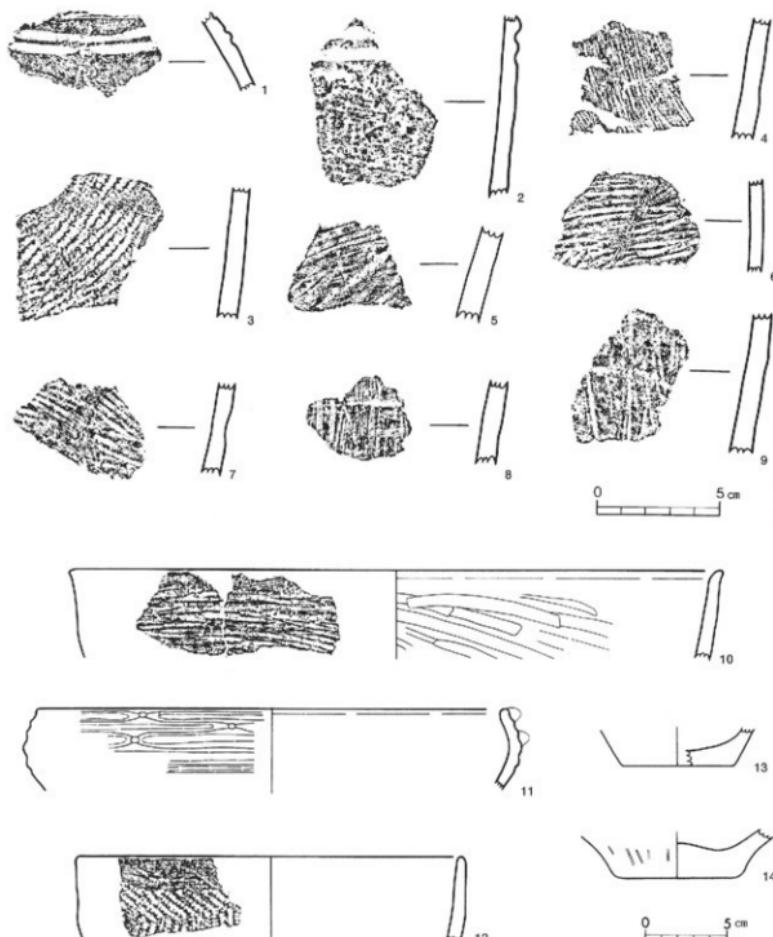
縄文土器、土師器、珠洲焼、青磁、白磁、砥石、鉄製品、銅錢、木炭、骨がある。

縄文土器（第11図1～14）

1は2条の沈線が連弧を描く。2は幅5mmの浅い沈線が2本平行に引かれ、下半には格子目状の浅い窪みがわずかに残っており、織物などの圧痕とみられる。表面に炭化物が付着する。3はLRの縄文原体を横方向に転がす。

4～10は条痕文を施す。4、8、9はほぼ縦位、5、7は斜位、6、10には横位の条痕を施す。

10の内面には幅7mmのヘラ状具による横方向のナデ整形を行う。11は内面の口縁端から3.2cmまでと外面全体を赤彩



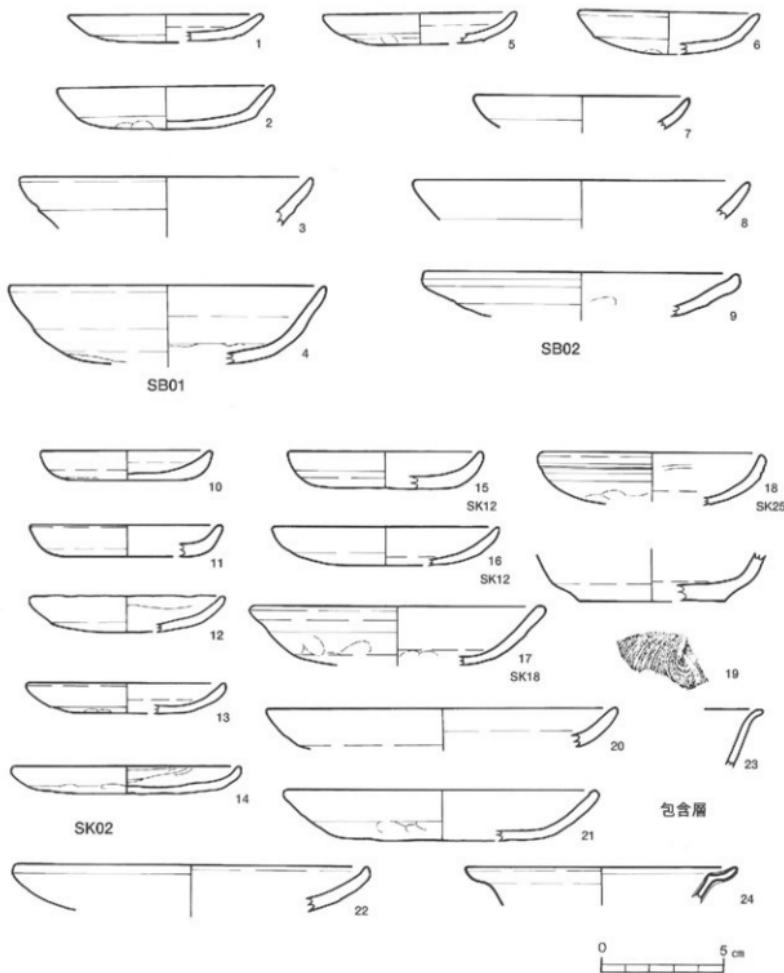
第11図 第1地区出土縄文土器（1～9は1：2、10～14は1：3）

する浅鉢である。2条のメガネ状突帯文と沈線を施す。12は平縁の口縁で、幅1.5cmの無文帯の下にRLの縄文原体を横方向に転がす。

これらは縄文晩期後半の下野式を主体とする一群の土器であり、その前後の時期を少し含む。

土師器（第12図1～22） 古代・中世のものがある。

19は底部に回転糸切痕を残す楕で、底部から体部にかけて屈曲して立ち上がる。10世紀前半頃とみられる。遺物包含層出土。

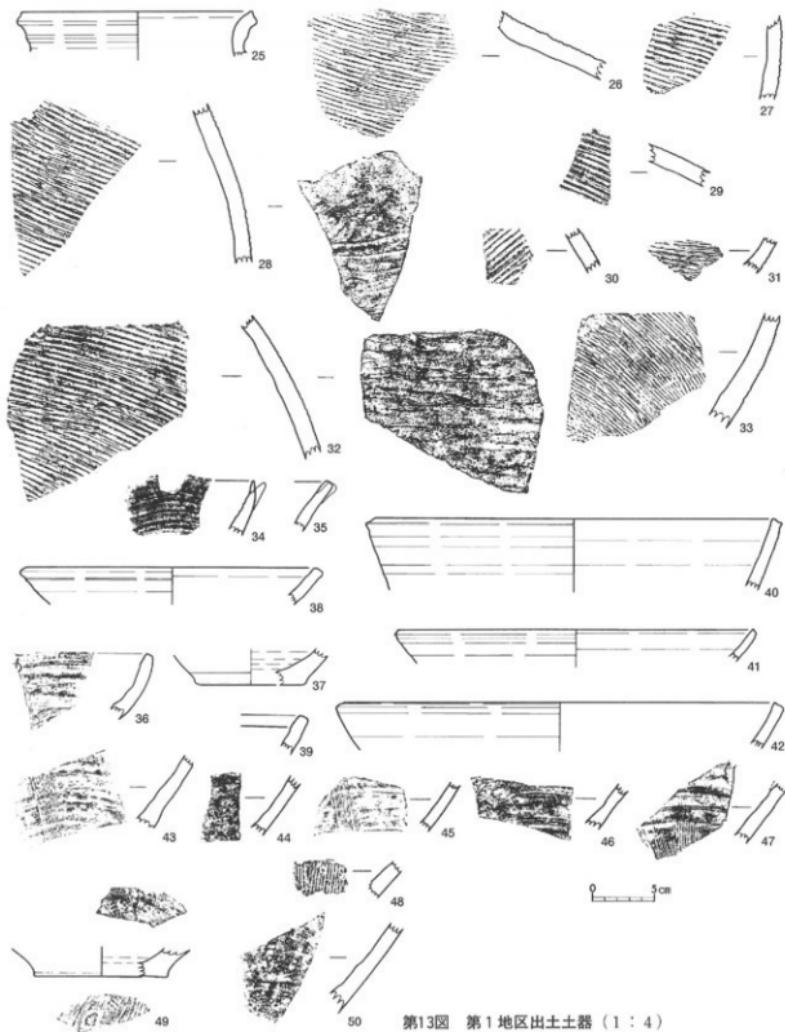


第12図 第1地区出土土器（1：4）

土師器（1～4：SB01, 5～9：SB02, 10～14：SK02, 15～16：SK12, 17：SK18, 18：SK25, 19～22：遺物包含層）、白磁（23）、青磁（24）

その他は皿である。4がロクロ成形、その他は非ロクロ成形である。図示しなかったものに他に2点ロクロ成形皿があるが、非ロクロ成形皿が主体を占める。

4は口径13cmで、器高3.2cm以上と深い。底外面及び口唇部に油煙痕が見られ、底部が黒化していることから、灯明皿として使用したとみられる。SB01 P9出土。



第13図 第1地区出土土器（1：4）

珠洲 25, 31~33, 34~49：④含層、26：SK09、27, 28：SK15、29~30：
SK23, 34~37：SK02、38：SB02 P3、39：SK09、40：SK18
八尾 50：SK02

非クロ成形皿は、直径7~9.5cmと12~14cmの大小がある。

小形のものは平らな底部から短く立ち上がるものの、やや丸みをもった底部から緩やかに立ち上がるものの、屈曲して立ち上るものがある。屈曲するものには口縁に強い横ナデを行う。大形のものには底部が平らなものが多く、器高が2.0cmほどのものと、2.5cmを超える深いものがある。

口縁端部を面取りするものは9、18がある。口縁端部を細くし、わずかに内湾する14、22以外は端部を丸くする。

12世紀後半から14世紀前半のものがあり、13世紀代のものが主体であるとみられる。宮田進一氏による編年（宮田1997）のⅠ期後半からⅢ期にあたる。

白磁（第12図23） 口縁端部が短く外反する。器厚4mm。遺物包含層出土。

青磁（第12図24） 龍泉窯系杯Ⅲ類3（横川・森田1978）の口縁で、口縁は短く外側へ広がる。口径11cm。13世紀末~14世紀前半。遺物包含層出土。

珠洲焼（第13図25~49） 中壺、甕、片口鉢がある。

25は中壺口縁部である。口径20cm。端部は短く外反し、端部上端をつまみ上げてシャープな縁を形成する。古岡編年（古岡1994）の壺T種AⅠ~Ⅳ類に該当し、Ⅳ期（14世紀代）にあたる。

甕（26~33）は甕体部である。28、32は内面あて其痕の上から横方向にナデを行う。

外面の削打は平行文で、細密なものが主で目粗いもののが少しある。

片口鉢（34~49）は、口縁形態により区分される。35~36、39、40~42は方頭の口縁端部をもつ。41は器壁が薄く、端面と内面端を櫛状具によりなでている。古岡編年のⅠ~Ⅲ期（12世紀後半）にあたる。38、42は端部上端をつまみ上げてシャープな縁を形成する。36は口縁がやや内湾する円頭状の端部をもつ。Ⅲ期にあたる。44は内面に櫛状具による波状文が下垂する。Ⅰ~Ⅱ期（12~13世紀前半）に属する。40は口縁外端部を外側に突出させる。Ⅱ期（13世紀前半）に属する。内面の削し目は8本、16本のものがあり、間隔のあくものが多い。Ⅲ~Ⅳ期（12~13世紀）に属する。

八尾焼（第13図50） 片口鉢がある。内面には10本の削し目を間隔をあけて引く。胎土には大粒の石英・長石を含む。13世紀代とみられる。SK02出土。

鉄器（第14図1~10）

1は、掘立柱建物SB01 P21の柱に添えて、切先を下に向けて埋納されていた小刀で、先端は欠けるが刃渡20cmを測る。建物建築に関わる祭祀遺物とみられる。

2は刀子先端で、SK02出土。3は先端のみが刃となる工具状製品である。SK15出土。

4は先端が断面円形、基部が太く方形になる錐状の工具状製品であり、中茎には柄とみられる木質が残存する。SB02 P18出土。

5は円環状製品で、断面は内面側が平らで縦に長い半楕円形である。内径3.3×2.1cmで厚さは2mmを測る。木製納尻金具と推定される。SB02 P9中層出土。

6はU字形の製品で、鉄の類とみられる。先端は横に平たい楕円形断面を示し、柄部とみられるU字形部分は断面円形となる。SB01 P22出土。7、8は釘で、7はSB01 P9出土。

9、10は針とみられる横斧形式の斧である。刃先はU字形で、刃厚は9が8mm、10が7mmである。いずれも刃部の横断面はやや反っている。柄の差込穴は9が円形、10が方形である。いずれも遺物包含層出土。

玉飾刺片（第14図11、12） SK17から2点、SK18から1点の計3点が出土した。

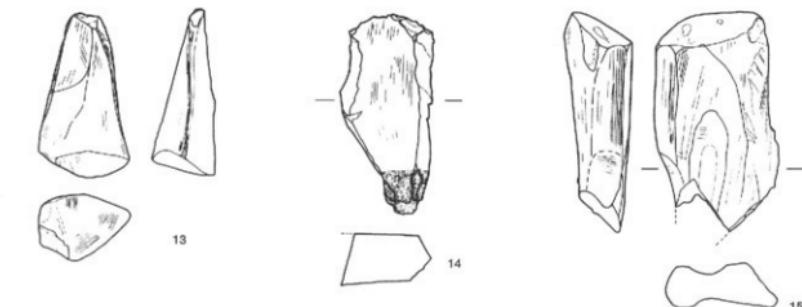
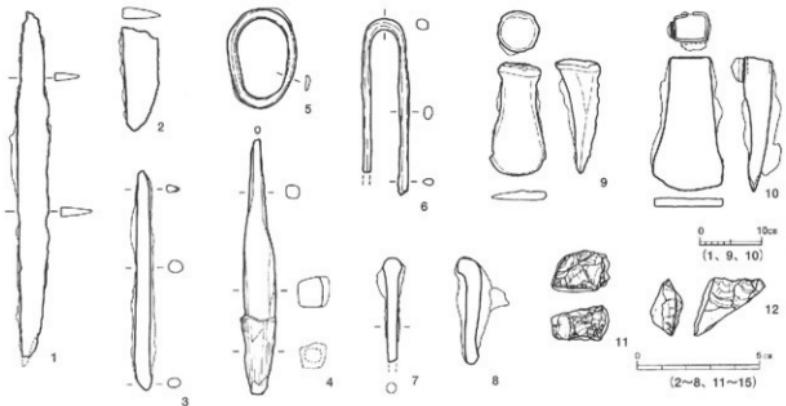
いずれも半透明の玉飾質の石材を使用している。11は調整剥離を施して立方体に形状を整えている。重量7.8g。12は自然縫を半削し、一端に大きな剥離を行う。重量6.4g。いずれも稜部に微細な連続剥離痕が認められ、火打石と

して使用されたものとみられる。SKI8のものは不整形な自然縫を分割した残片で、剥離痕などは見当たらない。

砥石（第14図13～15） 磨灰岩製のものがある。13はかなり使い込まれており、三角錐状の形状となっている。SK17出土。14の砥面はあまり使用されていない。熱を受けて破砕しており、基部は熱で黒化している。SK29出土。15は両面の中央が使用により窪んでおり、相当使い込まれている。砥面には、主軸と同方向の線状痕が顕著である。側面には主軸と直交する方向の線状痕がわずかに残る。

銅錢（表3、図版13） 墓壙・小ピットから計44枚が出土した。銭種が確認できたものには、唐錢「開元通寶」「乾元重寶」、北宋錢「太平通寶」「淳化元寶」「咸平元寶」「景德元寶」「天聖元寶」「景祐元寶」「皇宋通寶」「嘉祐元寶」「治平元寶」「元豐通寶」がある。大半は墓壙への副葬品で、被熱して劣化しているものが多い。文字は鮮明で、いずれも渡来銭である。

鉄滓（図版11下） 鎌冶滓とみられる鉄滓2点がある。1点はSB01 P20から出土。



第14図 第1地区出土鐵器（1～10）、石器（11～15）

5 第2地点の遺構(第15図) 繩文時代の土坑・小ピットを確認した。遺構は調査区の西部にまとまってみられる。

(1) 土坑(第16図)

S K 0 1 調査区の中央部で検出した。0.7×0.6mの不整円形プランで、深さ8cmを測る。南西寄りに径30cm、深さ40cmの柱穴状ピットがあり、この土坑より新しい構築である。覆土からは縄文晩期の土器破片が出土した。

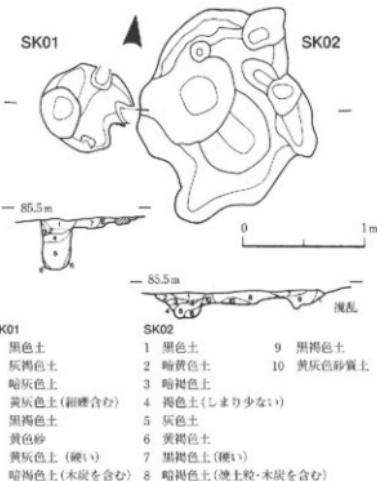
S K 0 2 SK01の東側で検出した。1.6×1.4mの不整円形プランで、深さ12cmを測る。大小のピットが複数し、西側の大きなピットはこの土坑より新しい構築である。

覆土からは縄文晩期の土器片と青磁が出土した。

表3 上布目遺跡出土の銅錢

番号	銅貨名	初鑄年	時代	遺構	番号	備考
1	開元通寶	621	唐	SK29	9	3枚重なり
2	乾元重寶	758	唐	SK02	8	
3	太平通寶	976	北宋	SK29	6	2枚重なり
4	淳化元寶	990	北宋	SK29	3	
5	咸平元寶	998	北宋	SK17	10	3枚重なり
6	景德元寶	1004	北宋	SK29		2枚重なり
7	天聖元寶	1023	北宋	SK31	1	2枚重なり
8	景祐元寶	1034	北宋	SK02	9	2枚重なり
9	皇宋通寶	1038	北宋	SK17	8	2枚重なり
10	皇宋通寶	1038	北宋	SK29	8	3枚重なり
11	嘉祐元寶	1056	北宋	SK17	5	
12	治平元寶	1064	北宋	SK29	4, 3	
13	元豐通寶	1078	北宋	SK29	2, 5	4枚重なり

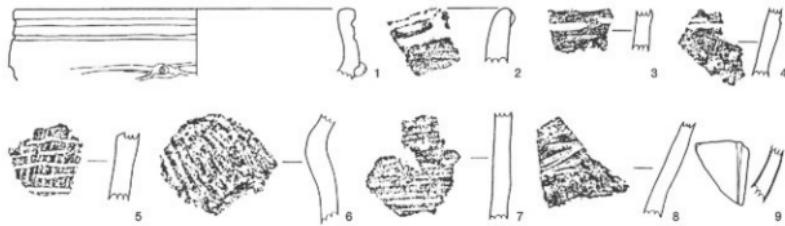
判読困難なものは除外した



第16図 土坑実測図 (1:40)



第15図 第2地区遺構平面図 (1:100)



第17図 第2地区出土遺物（1：2）、1～8 繩文土器、9 青磁

(2) 小ピット P 0 1 調査区北部で検出した柱穴状のピットである。

6 第2地点の遺物（第17図） 繩文土器、青磁がある。

縩文土器（1～8）縩文晩期に属するもので、図示したものはSK02から出土した。

1はメガネ状空帯と2条の沈線を施す浅鉢。2は小波状口縁の口縁端に、波状に平行して粘土紐を貼り付けるもの。3は平行沈線間に短線を引くもの。4、8は同一個体で、表面に沈線と横位の条痕、内面はナデた後横位の条痕を施す。5は縦位の条痕後短い沈線を横に引く。

6は頭部が緩く外反する深鉢で、外面には斜行する条痕が施される。7は横位の条痕である。これらは晩期後半の下野式に属するものとみられる。

青磁（9）龍泉窯系鍋蓮弁文碗で、12世紀末～14世紀のものである。SK02出土。

IV まとめ

上布目遺跡は調査の結果、縩文時代の集落跡、中世の集落・墓地が検出された。調査区付近では中世の大量備蓄銭が出土した上布目埋納跡があり、これに関連するであろう中世の集落が確認されたことにより、備蓄銭の意味合いも解釈が可能になろう。

1 縩文時代について

上布目遺跡では晩期後半の土器群が検出された。第1地区、第2地区とともにこの時期の少數の土坑・溝を検出しておらず、また調査地点から北約200mの地点からも試掘確認調査により縩文晩期の上器が出土していることから、縩文期の遺構は広い範囲に点在するものとみられる。今回の調査では明確な住居遺構を確認しておらず、中核的な集落の位置は不明であるが、約3km下流に出現する悪王寺遺跡や吉岡遺跡などの縩文晩期遺跡では竪穴住居の存在が確認されていることから、近接する場所に集落の存在が推定される。

上布目周辺には縩文遺跡が多く、これらの遺跡立地について概観する。

遺跡の出現は熊野川左岸河岸段丘上の東黒牧上野遺跡において早期後半にさかのぼり、数地点で土器が出土するが、集落の形成は明瞭でない。中期中葉に至りこの段丘上で大規模集落の形成をみる。しかし中期後葉に至り集落は激減し、後期後半までこの傾向は継続する。その後晩期後半の下野式期になると、熊野川右岸扇状地の至るところに遺跡が出現する。悪王寺遺跡（岡崎1969）や吉岡遺跡（富山市教委2002）では住居の一部や歩跡が検出されており、これらの多くでは集落が形成されているとみられる。この時期における爆発的な遺跡増加は、神通川や常願寺川の扇状地

扇端部においても顕著に認められる現象であり、湿地を利用した農耕の可能性（小島1987）、河川を意識した集落作り（財新潟県埋蔵文化財調査事業団ほか2001）などの要因が想定されている。

2 中世の遺構について

(1) 集落の変遷

調査で検出された主な遺構には、掘立柱建物、墓壙、土坑がある。これらは多くが重複関係にあり、時間的な変遷が認められる。掘立柱建物はSB02からSB01へと移行するとみられる。墓壙・土坑は主軸方向から、(1)SB02の梁行方向と同一（N 4° -E前後）のもの、(2)N 48° -E前後のもの、(3)SB01の桁行方向と同一（N 75° -W前後）のものの3グループに区分され、(3)の中ではさらに先後関係が存在する。これらの墓壙・土坑はSB02の廃絶後に構築されたものとみられるが、(1)のうちSB02と重複しないものはSB02と同時共存の可能性がある。(3)では錢埋納のない土坑が古く、錢埋納土壙の一群はそれより新しいとみられる。錢埋納土坑の廃絶後に掘立柱建物SB01が構築される。

このような遺構群の変遷から、12世紀中～後半にまず掘立柱建物SB02を中心とした屋敷が成立するが、12世紀末から13世紀前半に墓壙に転化され、13世紀後半に至って再び大型の掘立柱建物をもつ屋敷が構えられる、といった流れが想定できる。出土した土師器の年代比定には少し検討を要するため、年代的位置づけには異同があるかもしれないことを申し添えておく。なお途中で居住の断絶が生じる原因是不明であるが、年代からみて寿永2（1183）年の俱利伽羅の戦いの際、木曾義仲勢の別働隊が飛騨・長棟から月岡野を経て成子を渡った話が『内藤泉連録』に見える。このような社会的・情勢を反映しているのであろうか。

(2) 大型掘立柱建物

本遺跡の住居遺構は掘立柱建物からなる。総柱建物SB01、SB02は大型の総柱建物で、それぞれ5間×4間、4間×4間で、特にSB02は西面に庇をもつ。

梁間が4間を越える大型建物の存在は、多数の建物が配置される遺跡であっても数少なく、主屋的な性格の建物と考えられている。県内においては梅原渡磨堂遺跡では133棟中25棟（18.8%）（財富山県文化振興財团1994）、富山市南中田D遺跡（富山県埋蔵文化財センター1991）では45棟のうち1棟のみ（2.2%）で、他に3間×2間に四面庇がつく建物が1棟あり、これが最も中核的な建物とみられている。本遺跡で確認された2棟の建物は、他に消滅してしまった建物群の様子は不明であり全体構造はわからないが、規模からみると主屋的な建物とみてよいと思われ、4間×4間1面庇付建物から5間×4間堅穴状土坑付建物への変化が同位置において行われたとみられる。

中世前期における本地域は、鎌倉期以降大田氏が支配する太田保に含まれ、宝町期には管領細川氏が支配していた。遺跡が形成されていた12世紀後半から13世紀代は大田氏が有力化する時期にある。上布目周辺において大田氏に関する伝承は見出せないが、戦国期において成長した庄官百姓に布目村黒尾寄んエ門の名があり、由緒をもった土豪として位置付けられていることから、黒尾氏発展の前身となる有力な勢力がこの遺跡に居住し、周辺を支配していたことが想定される。

(3) 掘立柱建物に伴う堅穴状土坑について

中世掘立柱建物にはその内部の一角または近接して堅穴状土坑が存在する例が多く報告されている。堅穴状土坑の性格については河西健二氏が県内資料を集めて分析している（河西1994）。本遺跡の掘立柱建物SB01の東北隅に検出された堅穴状土坑SX01は、建物柱穴検出面とは10cm下がったレベルに半円面を有し、2間×1.5間分の広さをもつ。床面上には薺状の炭化物が多数認められている。このような状況は河西氏分類によれば、埋土バタンの2類（床面上に炭化物が堆積するもの）で、堅穴状土坑位置のロ類（建物内部の2スパン以上にわたるもの）にあたる。建物の時期としては12世紀後半～14世紀とする2段階に該当し、この時期にはロ類が多いとされている。また、堅穴状土坑の性格としては、薄く炭化物が堆積する2類では、炭化物は薺や蘿などの痕跡とされ、土間的な作業場としての機能が推

表4 大型豎穴状土坑をもつ据立柱建物一覧

遺跡名	建物名	建物規模・構造	土坑規模	土層・遺物	年代	備考
富山市・上新保	SB2	2×2間・四面庇	1×1.5間	鉄釘等	13~14C	
	SB9	4×3間	1.5×1.5間	白磁・珠洲・鉄釘	13~14C	
	SB18	4×4間	1.5×2間	集石・青磁・珠洲・鉄釘	13~14C	
富山市・任海鎌倉	SB20	4×3間・張出2	1×1.5間		12C後半・14C	
富山市・南中田D	SB34	5×3間・西面庇	1.5×2間		12C後半?	建物外に土坑
	SB45	3×3間・北面庇	1×2間	土師器	12C後半?	
福光町・梅原胡麻堂	SB13	3×3間	1.5×1.5間	土師器・珠洲・青磁・白磁	12C後~13C初	
	SB23	5×4間・張出1	1.5×2間	土師器・珠洲・青磁・白磁	13C後	
	SB26	3×3間	1.5×2間	土師器・珠洲・青磁・白磁 ・瓦質・集石	13C	
小矢部市・五社	SB74	4×2間・二面庇	1.5×2間	土師器・白磁	12C後~14C	

定されている。本遺跡における状況では、炭化物は底面のみならず遺構覆土にも多く含まれていること、床面が極めて硬く固められていること、床面には地山の礫が多く露出し、作業面としては良好な条件下ないことなどから、作業場よりもむしろ1頭程度の腰的な空間を想定したほうがよいように思われる。これらの建物が有力土豪の居屋であれば、既に左敷地内の別棟に存在する可能性が高いが、主屋専用の厩というものが存在したかどうかは不明である。

これらの豎穴状土坑が建物内に占める面積としては、柱間1×1間、1×1.5間、1×2間、1.5×1.5間、1.5×2間のものがある。1×1.5間以上のものは4間×4間以上の大型建物に多くみられる傾向にある。県内における1×1.5間以上の豎穴状土坑をもつ建物を表4に示した。これらの土坑ではまた生活雑器が出土することが多く認められている。このような状況も踏まえ、土坑の機能を検討していく必要があろう。

3 銭埋納土壤群について

銅錢が埋納された土壤群の性格を考えるにあたり、遺構の共通した特長をみると、遺構壁面や底面に顯著に焼けた痕跡は認められず、焼骨・炭・焼土・錢貨・礫が出土し、錢貨・礫は多くが焼けている。

鳥取市内の火葬墓の検討を行った中森祥氏によれば、このような状況を示す土坑は別の場所で茶毬に付されたものを拾骨し、納められたものとしている（中森2001）。

本遺跡における状況には2種に区分できる。ひとつはSK02のように大型で、土壤下部に木炭層が所在するもの、もうひとつは長幅0.6~1.1mの小型で浅く、上層に木炭・焼土・遺物が主に含まれるものである。いずれも出土した焼骨の量は少ない。前者において土層を仔細に觀察すると、焼けてはいないが壁際の土に焼土が混じっていることがわかる。この焼土の形成要因としては、土壤上部壁面が焼けたものの、地山が砂質土であるため焼けた壁面が砕くなつて崩壊したものと理解される。このような状況から、このタイプはここで茶毬を行った後そのまま埋葬した火葬土壤墓と理解できる。一方後者においては、上層の径が小さく、焼土や副葬品が土壤上部にまとまるところから、別の場所で茶毬に付されたものを拾骨し納めた土壤墓と考えられる。

出土した銅錢は熱を受けて劣化しているものが多く、茶毬の際に同時に焼かれたとみられ、所謂「六道銭」と理解される。六道銭は中世から近世にかけて流行した埋葬習俗で、茶毬や埋葬の際に死者に6枚前後の錢貨を持たせるものである。全国で4,400以上の例を検討した鈴木公雄氏によれば、副葬される錢の枚数は6枚のものが43%と圧倒的に多いが、1枚から311枚といったバラエティがあり、数十枚の大量錢を副葬する習俗も同時にあったとされる（鈴木1999）。本遺跡では枚数は2枚、8枚、12枚、25枚であり、なかには4枚、6枚が付着したままのものも見られる。これらはバラで納められたのでなく、紙や布にくるまれた状態で遺体に持たせたものと理解されている（鈴木前掲）。

中世から近世における県内の六道銭出土遺跡を表5に掲げた。本遺跡の4例を含め18例があり、半数以上が中世未

から近世初期に含まれる。中世に残するものはほとんどが土塼墓であるが、本遺跡のように火葬した遺体に副葬したという確実な例は今のところ見出しができず、現在のところ木造跡が最も初期の例といえる。

また、本遺跡では錢埋納はないが同じく火葬したとみられる土塼墓が5例ある。この他にも12基以上の長方形土坑があり、木炭や骨片は出土しないが形態上は墓と考えてもよいと思えるもののが存在する。このような例も一庵墓として捉えた場合、錢埋納土塼は全体の2割弱であり、また特定の1か所に集中するといった状況が認められる。このようなことから、錢埋納土塼へ埋葬された人物はこの遺跡の支配階級に属する人々であったと考えてよいであろう。

表5 土坑埋納銭出土一覧（富山県内）

遺跡名	所在地	土塼形状	土塼名	規模(長・幅・深)	出土枚数	銭種	年代	性格	備考
古倉A	富山市	横円	SK-9	5.5×2.7×0.2	2	照寧元寶ほか	16C?	火葬墓?	
古倉A	富山市	円	SK-33	1.1×1.0×0.45	1	天祐通寶	16C?	火葬墓?	
古倉B	富山市	隅丸長方	SK-2	3.2×1.7×?	1	照寧元寶	中世		土坑肩から出土
南中田D	富山市		SK-3098		27	不明	12~13C		
南中田D	富山市		SK-3952		6	不明	中~近世		
南中田D	富山市		SX-107		1?	不明	中~近世		
梅原出村畠	福光町	円?	SK06	?×1.6×?	2	永楽通寶	中世		
梅原安丸	福光町	隅丸方	SK-14	4.6×3.8×0.5	4	洪武通寶・永樂通寶 ・照寧元寶ほか	15~16C	火葬施設	五輪塔・ヒト焼骨 出土
田尻	福光町	横円	SK-601	1.5×0.8×0.5	1	不明	17~18C以前		
開創大滝	福岡町	方	SK879	2.2×2.0×0.16	1	元豐通寶?	16C?		
開創大滝	福岡町	横円?	SK381	?×2.1×0.16	1	元祐通寶	16C?		
五社	小矢部市	不整形	SK-8050	2.1×1.2×0.15	2	政和通寶・皇宋通寶	12~14C		円形土坑の重複か
地蔵	小矢部市	横円	SK170	3.0×2.4×0.6	1	洪武通寶	16~17C	躰跡	
地蔵	小矢部市	不整形	SK296	2.5×?×0.4	1	永樂通寶	17C	廣業土坑	

参考文献

- 青山 見 1998 「中宗詔跡・持田遺跡における中世集落の様相」『富山考古学研究 紀要別冊刊行』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
 青山 見 1999 「神通川右岸における中世集落の様相」『富山考古学研究 紀要第2号』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
 尾立順司 2001 「出土鉄貨研究の地域的現状 中部地方」『季刊考古学第78号』雄山閣
 魚津市教育委員会 1981 「富山県魚津市川辺近世農耕発掘調査報告書」
 越前横子 2000 「富山遺跡における若干の土塼跡」『開創大滝遺跡・地蔵遺跡発掘調査報告―能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ―』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
 大山の歴史研究会編 1993 「大山の歴史」大山町
 大山町教育委員会 1990 「高木堀人山町中世城跡調査報告書」
 大山町教育委員会 1990 「富山県大山町東黒牧上野遺跡A地区発掘調査概要」
 岩崎卯 1969 「富山市墨守寺跡(假跡)の発掘」『富山考古学会通誌33号』
 河西龍二 1993 「源氏における様相」第6回北陸中世山研究会 中世北陸の家・庭・墓・暮らしぶり「北陸中世山研究会」
 河西龍二 1994 「誰が建物を構成―古墳から近世まで―」『埋蔵文化財年報(5平成5年度)』財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
 離野郡史埋蔵品委員会編 1989 「離野郡土史」
 莺原義典 1999 「埋められた土鏡」『季刊考古学第39号』
 小林 克 2001 「鬼火見2・火打石」『医歴江戸考古学研究事典』柏原房
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1994 「梅原賀坊跡・鬼火見発掘調査報告(遺構編)」東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ-1
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996 「梅原胡摩堂跡発掘調査報告(遺物編)」東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ-1
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996 「梅原賀坊跡・久戸跡」 桐原安丸・田尻遺跡発掘調査報告一・東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ-1
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1998 「五社跡発掘調査報告―能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ」
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2000 「開創大滝遺跡・地蔵遺跡発掘調査報告―能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ-1」
 島田美佐子 1994 「5基」『梅原胡摩堂跡発掘調査報告(遺構編)』東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅰ-1財團法人富山県文化振興財團
 鈴木公雄 1993 「源氏時代から近世の前駆戦闘遺跡の復元―「藤原・考古学」」
 鈴木公雄 1999 「出土銭貨の研究」東京大学出版会
 高岡徹ほか 1980 「日本城郭体系」新潮・滋賀・石川・川上「新人物往来社」
 高瀬重慶監修 1994 「富山県の地名」日本地名大辞典16 平凡社
 月岡郷土史編集委員会編 1991 「月岡郷七史」
 富山県郷土史研究会 1979 「富山県歴史の追跡叢書報告書・成駒街道(その1)」
 富山県教育委員会 1995 「富山県道路地図」

報告書抄録

ふりがな	とやましかみぬのめいせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	富山市上布目遺跡発掘調査報告書						
副書名	上砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	116						
編著者名	古川知明						
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター						
所在地	〒930-0803 富山市下新本町5番12号 TEL. 076-442-4246						
発行年月日	西暦 2002年 3月 22日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 古町村 遺跡番号	北緯 ○○○	東経 ○○○	測定期間	調査面積 m ²	調査原因
かみぬのめ 上布目遺跡	とやましかみぬのめ 富山市上布目	16201	36度 36分 26秒	137度 15分 29秒	20010226～ 20010411	320	土砂採取
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
かみぬのめ 上布目遺跡	繩文 平安 集落跡・墓地	土坑・溝 なし 鎌倉～室町 掘立柱建物3棟、墓 塚9基、土坑13基等	繩文晚期土器 土師器 中世土師器、青磁、白磁、珠洲焼、 八尾焼、砥石、鉄貨、鐵器（釘、 刀子、小刀、鉗、円環状金具、錐、 鉄、工具類）、鐵洋、焼骨、木炭	墓地は複数の錢貨 (六道錢)を副葬した 火葬墓とみられる			

富山県埋蔵文化財センター 1990 「富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査要旨」 萩山植物遺跡 南中田A遺跡 任海謙倉遺跡 南中田C遺跡

富山県埋蔵文化財センター 1991 「富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書」

富山県埋蔵文化財センター 1993 「富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告書(5) 任海謙倉遺跡 古倉A遺跡 古倉B遺跡」

富山市 1987 「富山市史 過去史」

富山県教育委員会 1993 「富山市遺跡地図(改訂版)」

富山県教育委員会 2000 「富山市：新幹線遺跡発掘調査報告」

富山大百科事典編集事務局編 1994 「富山大百科事典」 北日本新聞社

中村太一郎 1963 「富南の歴史」「富南の歴史」刊行会

中村一洋 2001 「中世の火葬墓について」 鳥取市瀬山町廻辻を中心に「出土銭貨研究会研究紀要 出土銭貨研究」出土銭貨研究会

福光町教育委員会 1993 「富山県福光町御原出土遺跡群」 櫛原上村遺跡群！」

藤沢典彦 2002 「富山中押納銭貨の変遷 六道錢の成立をめぐって」 『季刊考古学』第78号

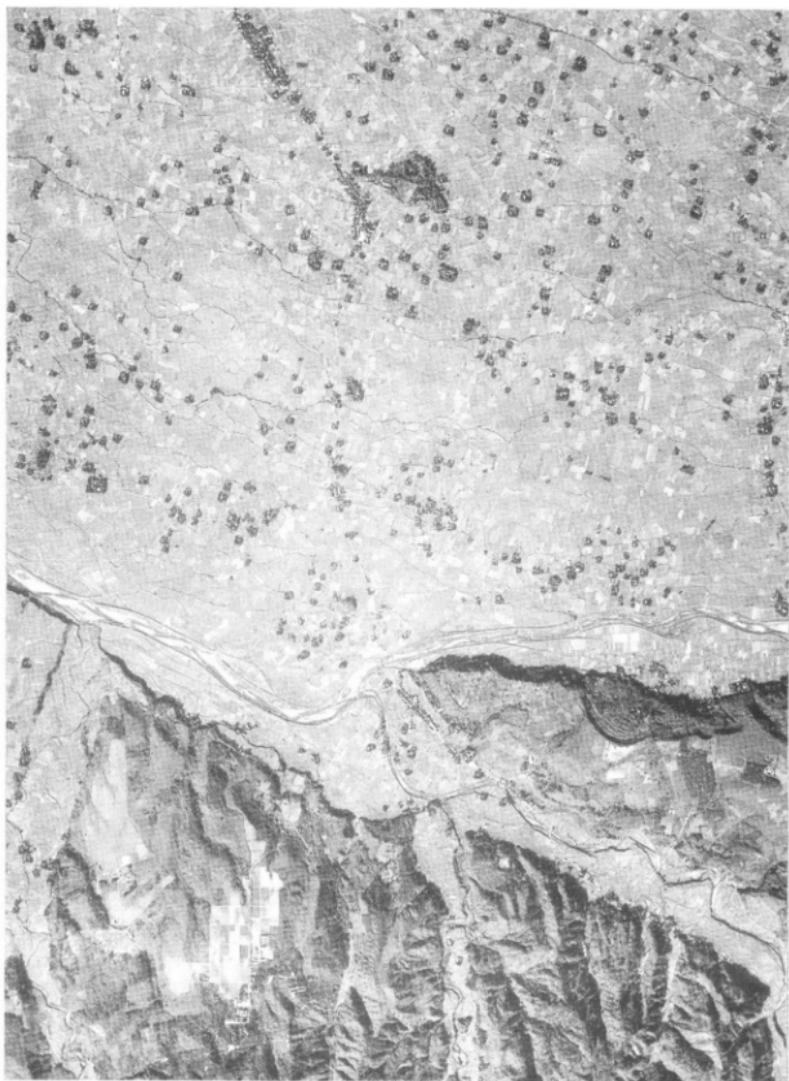
二島道子 2000 「開拓大造遺跡中世層の並みについて」『開拓大造遺跡・地陪遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－』 財團法人富山県埋蔵文化振興財团埋蔵文化財調査事務所

二島道子 2001 「風洞式自走路の穴吹き造橋について」『富山考古学研究 紀要第4号』 財團法人富山県埋蔵文化振興財团埋蔵文化財調査事務所

宮田道一 1997 「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編

横山四次郎・森田勉 1978 「大字岸田の輸入中間陶器について」『九州歴史資料館研究論集4』

吉岡康晴 1994 「中國須恵器の研究」 古川弘文館



1947（昭和22）年 米軍撮影空中写真（上が北）



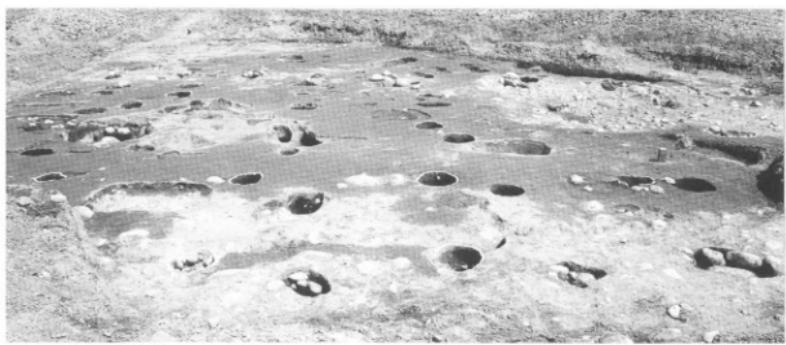
1992（平成4）年 国土地理院撮影空中写真（上が北）



第1地区 調査区全景（北から）



同上（南東から）



第1地区 掘立柱建物SB01（南から）白いマークが柱穴



同上（東から）



同上（西から）



▲
第1地区 繩文時代の遺構
SD01・SD02 及び遺物集中地点
(SD02の左側) (北から)

◀遺物集中地点 (南東から)
(竹串が土器出土位置)



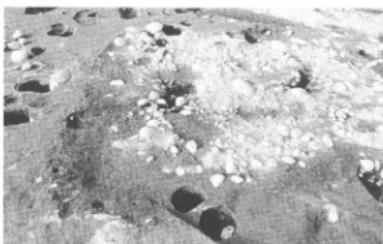
第1地区 土坑SK10 繩文土器出土状況 (北から)



同左 (部分)



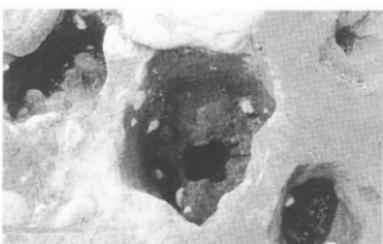
第1地区 遺構検出状況（南東から）



豊穴状土坑 S X 0 2 完掘状況（南から）



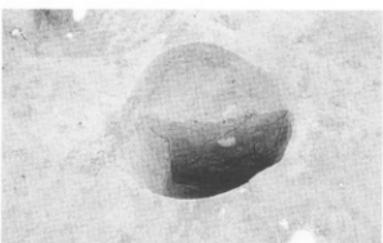
土坑 S X 0 3 完掘状況及び土層（南西から）



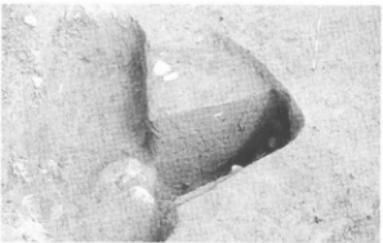
掘立柱建物 S B 0 1 P 5 柱痕（方形状）



掘立柱建物 S B 0 1 P 7 土層（南東から）



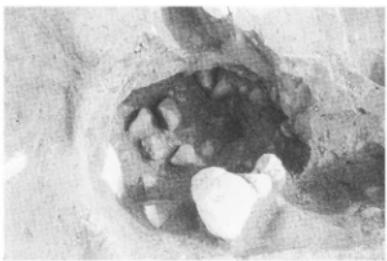
掘立柱建物 S B 0 1 P 16 土層（南西から）



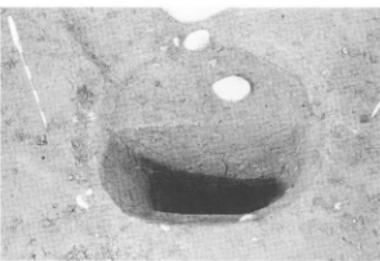
掘立柱建物 S B 0 1 P 19 土層（南西から）



掘立柱建物 S B 0 2 P 22 鉄出土状況（南西から）



第1地区 SB 02 P 3柱底部の礫



掘立柱建物 SB 02 P 1 土層（南東から）



銭埋納土壌 SK 02 (西から)



同左（南から）



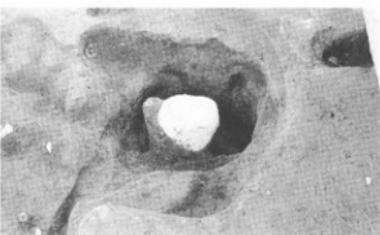
SK 02 土層（南西から）



SK 02 銭・土器出土状況（南西から）



銭埋納土壌 SK 17・SK 31 土層（南西から）



SK 17・SK 31 銭出土状況（北東から）



第1地区 錢埋納土壤SK17・SK31出土状況（北東から）



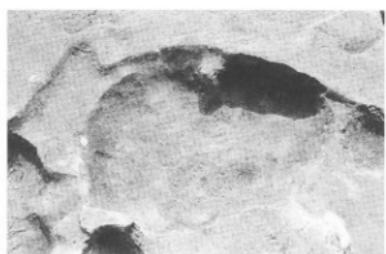
同上（部分）



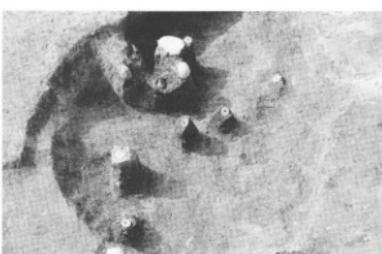
第1地区 錢埋納土壌SK 29土層（北西から）



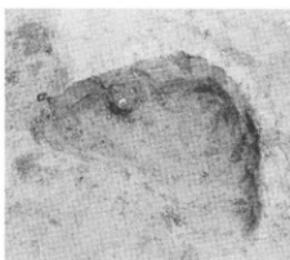
SK 29土層（南西から）



SK 29完掘状況（北から）



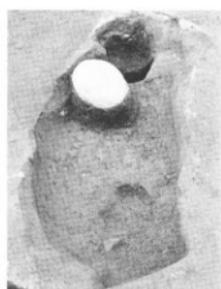
SK 29銭検出状況（南西から）



P 02銭検出状況（西から）



土壌SK 15出土状況（南から）



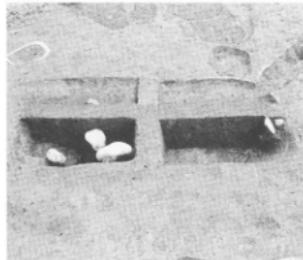
SK 15完掘状況（南から）



土壌SK 16完掘状況（北東から）



土壌SK 18土層（東から）



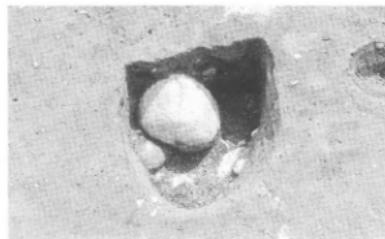
第1地区 土坑SK 20土層（西から）



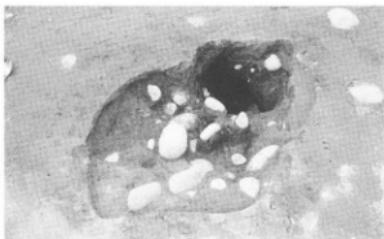
SK 20土層（南から）



SK 20出土状況（南から）



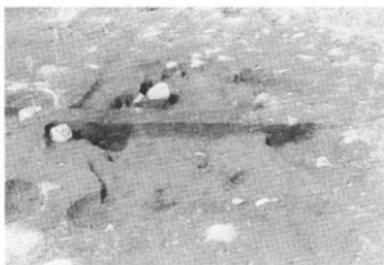
第1地区 土坑SK 24完掘状況（北から）



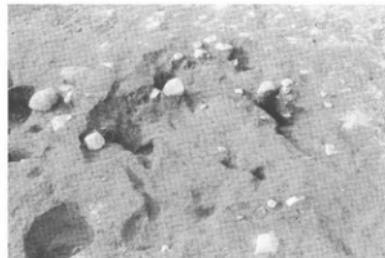
土坑SK 27検出状況（南西から）



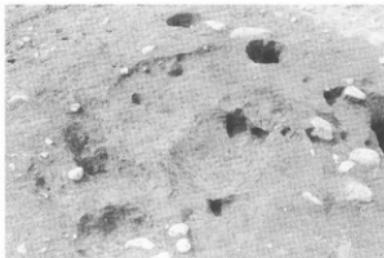
第2地区 調査区全景（北西から）



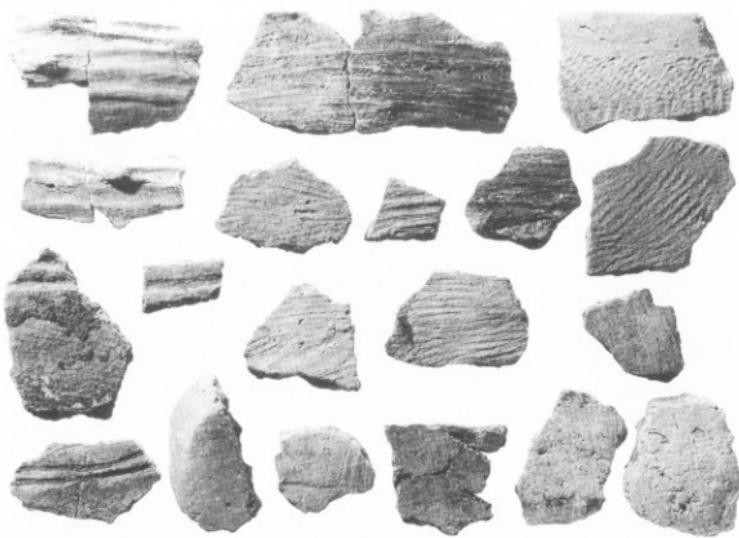
第2地区 SK 02土層（南東から）



第2地区 SK 02縄文土器出土状況（南東から）



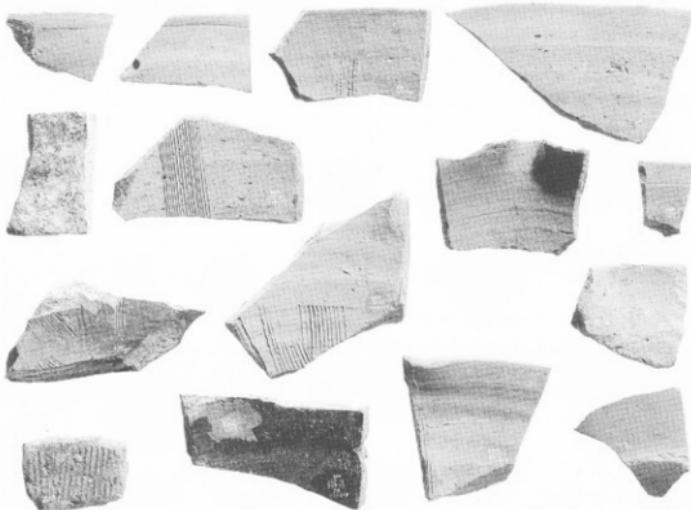
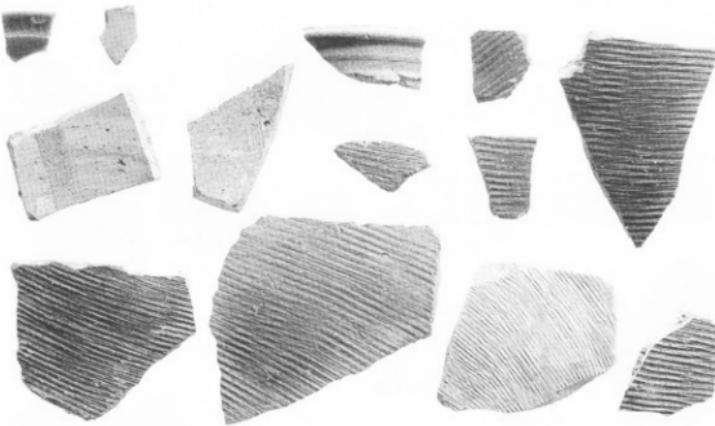
SK 02完掘（北東から）



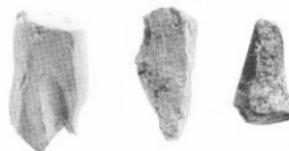
第1地区出土绳文土器 (1/2)

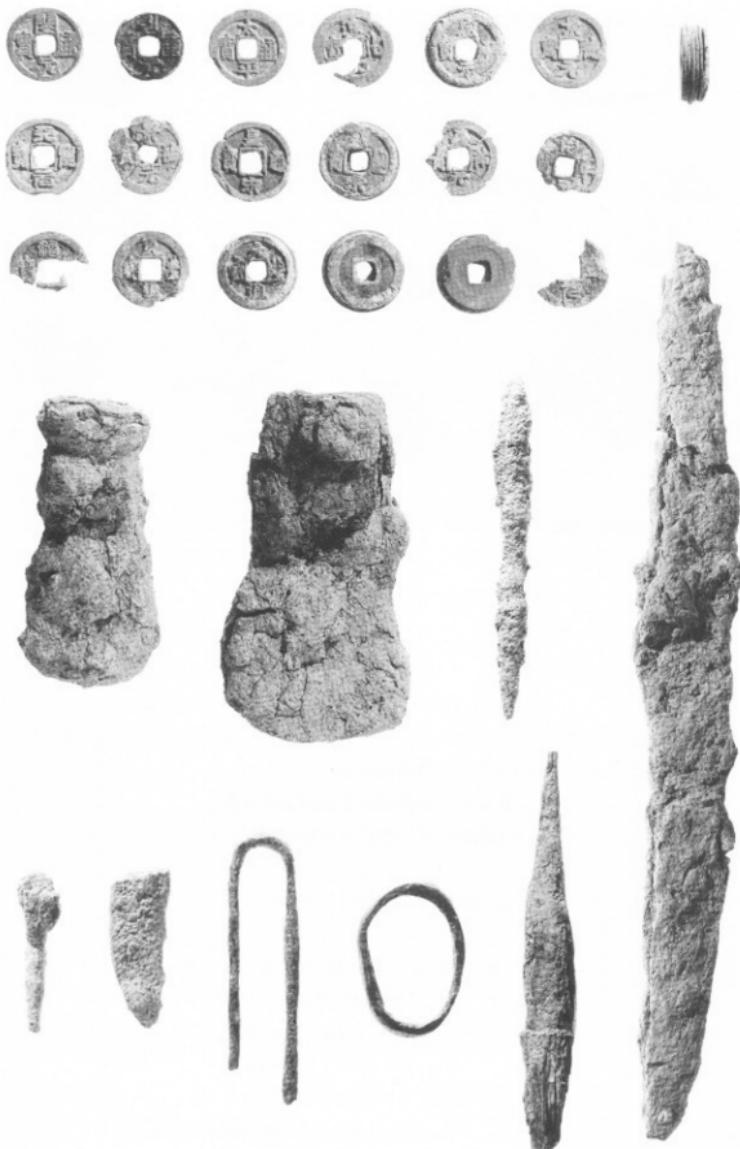


第1地区出土土師器 (1/2)、剥片 (2/3)、鐵滓 (2/3)

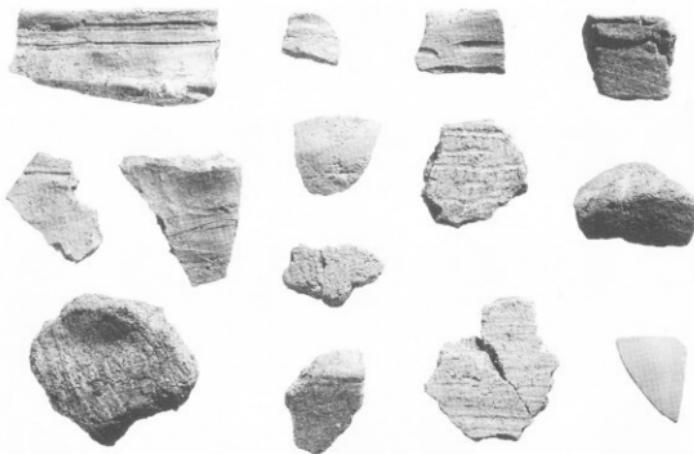


第1地区出土 青磁・白磁(1/2)、珠洲(図版上1/3、
図版下1/2)、八尾・砥石(1/3)





第1地区出土銅錢・鐵器 (2/3)



第2地区出土繩文土器・青磁 (2/3)

富山市埋蔵文化財調査報告116

富山市上布目遺跡発掘調査報告書

—土砂採取に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2002(平成14)年3月29日発行

発 行 富 山 市 教 育 委 員 会

編 集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803 富山市下新本町5番12号

Tel 076-442-4246

Fax 076-442-5810

E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp

印 刷 大 東 印 刷 株 式 会 社

